

市民文化財研究員活動報告書 18

2014. 3

仙台市教育委員会

仙台市富沢遺跡保存館

は　じ　め　に

地底の森ミュージアムが開館して１７年が過ぎ、これまで７０万人を超える方々のご来館を頂きました。これも皆様方のご厚情の賜物と感謝申し上げます。

当館では、学校教育活動との緊密な連携を図りながら、市民の生涯学習を支援するため各種体験教室・講座を開催しております。また、その一環として遺跡や考古学について深く学びたい、そうした意欲を持った方々の自主的な学習を支援するために、市民文化財研究員育成という特色ある事業を行ってまいりました。これまで、１６期１２４名が市民文化財研究員の研修を修了し、多くの方々が当館のボランティアとして様々な活動を行っております。

今年度、第１７期市民文化財研究員１２名が、それぞれのテーマに沿った活動を行い、そのうち７名の方々が活動成果として本書で報告しました。これからの研究員の活動に期待するとともに、今後とも皆様方のご指導・ご支援をお願い申し上げます。

平成２６年３月

仙台市教育委員会
教育長 上田 昌孝
仙台市富沢遺跡保存館
館 長 金森 安孝

目 次

I 市民の自主的な生涯学習活動への支援

II 市民文化財研究員とその活動

III 活動支援概要

IV 活動報告

吉野ヶ里集落の推移	板橋節子	8
日本へやって来た人々	裏川久美子	12
富沢遺跡周辺地域で先人たちが展開して来た暮らしの変遷	加藤 茂	28
郡山廃寺の瓦	佐藤陣一	34
東北の装飾古墳の考察	末永志津	38
貝殻から覗いた縄文人の暮らし	菅原義雄	42
南小泉遺跡と遠見塚古墳の考察	峯岸義雅	54

例 言

1. 本書は平成25年度市民文化財研究員活動報告書である。
2. 本書の執筆は、IVの各活動報告を市民文化財研究員がそれぞれ行い、そのほかは仙台市富沢遺跡保存館が行った。
3. 報告書作成に際して、参考にした文献や資料は参考文献として記載したが、紙数の関係でその全てを記載していないものもある。

I. 市民の自主的な生涯学習活動への支援

1. 基本構想における位置づけ

地底の森ミュージアムの建設は、1988年の富沢遺跡第30次調査における2万年前の森の跡と旧石器人のキャンプ跡の発見を契機としている。それは、この調査成果の重要性から、仙台市が調査対象地区の保存を決定し、その活用を図るために、翌年、基本構想策定委員会を設け、策定された構想において「考古系総合博物館」の建設がうたわれたことに始まる。この構想では、博物館の様々な活動の中で、生涯学習活動の基本方針の一つとして、「市民が、文化財に関するさまざまな情報にふれ、興味や関心に応じて自らのテーマを追求できるようにする」とし、「市民の考古学教室」などを通して、自主的な活動を支援する方法が考えられていた。これは、文化財、特に埋蔵文化財について、その大切さを知ってもらうために、それまで行われてきた発掘調査の現地説明会や考古学に関するさまざまな講座、講演会、展示会などとともに、より積極的な方法を推進していくことを示したものであった。

2. 生涯学習活動と市民文化財研究員

地底の森ミュージアムでは、生涯学習活動として、来館者に自由に参加してもらう富沢講座、石器を使ってみようコーナー、参加者を公募する旧石器体験教室、親子体験教室、考古学講座などを行っている。こうした活動に参加した市民のなかには、新たな興味をもったり、もっと遺跡や考古学を知りたいと思う人がいて、専門的な質問を受けることもある。また、一般の来館者についても、その関心は富沢遺跡だけではなく、地域や時代を越えていることを認識させられる。

こうしたこともあり、基本構想にもうたわれていた市民の自主的な活動の支援をどのように行っていくかが開館を前後するなかで検討された。特に、施設面では館内に専用のスペースはなく、また、研修室の利用や、利用日の工夫、支援する市民の数など、制約は多かったが、平成8年度に第1期の「市民文化財研究員」15名を募集し始め、平成24年度まで16期にわたって合計124名の活動成果を『市民文化財研究員活動報告書1～17』として刊行してきた。平成20年度からは報告書をHPで公開している。

平成25年度は、新たに12名の第17期市民文化財研究員の応募があり、それぞれのテーマに沿って自主的に活動を行ってきた。

Ⅱ．市民文化財研究員とその活動

1．目的

考古学や遺跡に興味をもっている市民が、地底の森ミュージアムを核として、その支援を受けながら、自主的にそれぞれのテーマを学び、歴史や文化をより身近なものにすることを目的としている。

2．活動期間

各年度ごとの1年間とする。定員は15名（今期は平成25年4月9日～平成26年3月26日）

3．支援の内容

（1）研究場所の提供

地底の森ミュージアム1階研修室の開放。

（2）研究の仕方・方法についての相談受付

学芸員による考古学についての講義。

学芸員による個人ごとの対応。

（3）収蔵図書の利用

室内での閲覧。必要箇所の複写については有料。

（4）市民文化財研究員証の発行

登録日あるいは相談があるときは、これを提示し入館。

4．活動内容

（1）毎週水曜日午前2時間の学習（地底の森ミュージアム1階研修室）

登録日（館員1名が在室） 水曜日 10：00～12：00

（2）年1～2回開催する見学会での学習（遺跡や博物館施設の見学）

（3）活動報告書の刊行

（4）その他

①館内では、市民文化財研究員証をネームプレートとして付ける。

②登録日が休館日にあたった場合は学習を休みとし、翌日に順延しない。

③研修室が使えない場合があるため、事前に予定表を配布して周知する。

Ⅲ．活動支援概要

1．概要

研究員はそれぞれのテーマで館内外で活動を行った。それについては活動報告に述べられている。ここでは館での支援活動の概要を総括する。

平成25年4月～6月	登録日学習の開催日学習のための研修室開放
7月～9月	自主学習期間
9月～12月	登録日学習の開催日学習のための研修室開放 活動報告書執筆のための相談
平成26年1月～3月	登録日学習の開催日学習のための研修室開放 活動報告書執筆のための相談

2．第17期市民文化財研究員修了者（五十音順）

板橋節子 裏川久美子 加藤茂 佐藤陣一 末永志津 菅原義雄 峯岸義雅

3．週1回の半日単位の学習

今年度は、週1回の登録日を、水曜日の午前に設け活動を行った。

4．登録日学習内容の概要

平成25年4月21日	オリエンテーション
6月19日	博物館・遺跡見学（多賀城跡など）
11月11日	ボランティア・市民文化財研究員研修旅行
平成26年2月19日	活動報告原稿提出
3月26日	研修旅行・修了式

5．研修会・研修旅行

今年度の研修旅行は、平成25年11月11日に石巻市沼津貝塚などを地底の森ミュージアムおよび縄文の森広場のボランティアと合同で見学した。平成26年3月26日には、七ヶ浜町歴史資料館・国指定史跡大木囲貝塚を見学した。

年	月日	活動内容	出席
2013年	4月10日	オリエンテーション	11
	4月24日	考古学概説	8
	5月8日	旧石器時代概説	10
	5月22日	縄文時代概説	10
	6月5日	弥生時代概説	10
	6月12日	古墳時代概説	10
	6月19日	遺跡・博物館見学（多賀城跡・東北歴史博物館）	9
	6月26日	古代～近世概説	8
	7～9月	夏休み・自主活動期間	
	10月2日	個別（希望）テーマ講義	9
	10月9日	個別（希望）テーマ講義	9
	11月6日	個別（希望）テーマ講義	8
	11月13日	個別（希望）テーマ講義	8
2014年	11月20日	シンポジウム参加	7
	11月27日	個別（希望）テーマ講義	6
	12月11日	個別（希望）テーマ講義	8
	12月18日	個別（希望）テーマ講義	7
	1月8日	個別相談	3
	1月22日	個別相談	2
	1月29日	個別相談	2
	2月5日	個別相談	2
	2月19日	レポート提出期限	6
	2月26日	レポート校正作業・テーマ講義	6
	3月5日	レポート校正作業	3
	3月19日	レポート校正作業	6
	3月26日	遺跡見学・修了式	7



講義の様子



遺跡見学の様子（多賀城碑）

Ⅳ．活動報告

考古学あるいは遺跡について、研究員それぞれのテーマで行った活動成果をまとめた。第17期市民文化財研究員は、平成25年2・3月の募集で、実際の活動は4月からであった。

それぞれの活動をみると、登録以前から考古学や遺跡について興味をもち、活動当初から具体的なレポート作成にむけた動きをするなど、積極的な傾向がみられた。その中で、博物館や遺跡を実際に訪れ、そこで体験して感じたことや疑問に思ったことをそれぞれのテーマとして決定した傾向がある。それぞれが決定したテーマについては、文献を調べるなど、様々な調査を行って、自身が設定した問題と向き合っていた。

こうした研究員の活動は、それぞれのペースを大切にしている。また、個人的な事情で活動をつづけられなくなった方もいた。そのため、今回は7名の活動を報告することにした。

吉野ヶ里集落の推移

板橋節子

1. はじめに

私は、平成25年度市民文化財研究員として学ぶ機会を得た。そして、同年6月九州旅行の折、たまたま吉野ヶ里歴史公園に立ち寄った。そこは弥生時代の吉野ヶ里集落、建物、人々の様子が復元整備されている40haもある広大な国営公園である。公園の中に入ると、地元の人と思われる公園スタッフが、幼き頃自分の祖父から聞いたという江戸時代の話も交えて分かりやすく説明してくれた。説明を聞きながら、自分が立っているこの広大な地に弥生人が実在していたのかと思うと、弥生時代から現代まで繋がっていることに表現できないような不思議な気持ちになった。

そこで今回、吉野ヶ里集落が、なぜ弥生時代700年間も存続したのかを調べてみることにした。

2. 方法

弥生時代や吉野ヶ里遺跡等、全く分からない私が知識を得るために、図書館の児童書コーナーの「にほんのれきし」の棚から数冊借り読み始めた。その後、吉野ヶ里遺跡に関する参考文献を教えて頂き、それらの本を参考にして、レポートを書きあげることにした。

3. 成果

吉野ヶ里遺跡は、現在、佐賀県神埼市と吉野ヶ里町に跨っている。弥生時代、吉野ヶ里周辺は、大小河川の流入による堆積作用や有明海の潮汐作用によって形成された谷底平野や扇状地・三角州が発達し、豊富な水と温暖な気候という自然環境が整っていたため、小さな集落が出現した。また、内海である有明

海は、国内最大の干満の差があり、満潮時には、平野部の奥深く潮が上がり大量の物資運搬の手段として船舶の航行に適していた地域でもあった（七田2005）。

弥生時代前期（紀元前5～前2世紀）前半、佐賀平野を一望できる低丘上に分散的に吉野ヶ里集落ができた。やがて、防御を目的として環濠が掘られ、約3haの環濠集落がつくられた。前期後半になると南北に1kmものびる丘陵上に7～8か所の小規模な居住域がつくられた（石川2010）。

弥生時代中期（紀元前2～紀元1世紀）は、前期に掘られた環濠も埋没し、丘陵の南側を一周するような外環濠が掘られ、環濠によって囲まれた面積は約20haにもなり甕棺墓地を持つ集落になった（石川2010）。

墓地から出土した弥生人骨の中には、頭骨のないものや矢を射こまれたもの等から、戦争の犠牲者らしき人骨もある。

これらのことから、敵の侵入から集落を守る環濠を掘り、また戦争によって勝利した集落と敗北した集落に主従関係が成立し、勝利した集落は大集落へと発展していった（鎌田2012）。

歴代の首長等、身分の高い人々が埋葬されたと思われる墳丘墓は、吉野ヶ里丘陵の尾根の最高所に位置し、南北40m、東西27m以上の長方形に近い形と推定される。高さは黒色土を1.2m盛った土に幾層にも様々な土を盛った小山を積み重ねて築かれ、元来は4.5m以上の高さであった可能性があるらしい。

また、墳丘墓は一般の甕棺墓地と比較すると大型の大人用の甕棺で外側・内側を黒色顔料（漆または炭化物）で真っ黒く塗られ、銅

剣や管玉、絹など高い身分を示す副葬品が出土され、甕棺の埋葬密度が低くなっている（吉野ヶ里歴史公園パンフレット）。

加えて、墳丘墓の近くから長さ 600 m ほどの道路の左右で甕棺墓列が発見され、これらも比較的身分の高い人々の墓とされている。その他、各所に多くの共同甕棺墓も発見されている（古川 2009）。

甕棺墓は、高さ 1 m 以上の素焼きの甕形土器を棺として用いた墓であるが、長期間土中に埋まっていたにもかかわらず内部の空間が保たれることが多いため、遺物の保存を可能にした。そのため青銅器や鉄器、絹や大麻、各種玉類、腕輪等が出土した。

弥生時代後期（紀元 1 ～ 3 世紀）は、国内最大級の環濠集落へと発展した。面積は 40 m 以上と思われる大規模な V 字形の外環濠に囲まれ、さらに特別な空間である南内郭と北内郭が存在した。

南内郭の内部は、竪穴住居群や物見櫓、城柵等がつくられ、また多数の鉄製品が出土している。さらに内環濠に囲まれた竪穴住居群が存在することから、身分の高い人々の居住空間だと思われる。

北内郭は、銅戈等の祭祀関連遺物が出土することや、吉野ヶ里集落の最高祭祀権者の居住祭祀の場、政治の場として最も重要で神聖な空間だと思われる。

さらに発掘によって、中国古代の都城構造（特に防御施設）の伝播の可能性や王が北に座し臣下が南に朝する「座北朝南」という礼制の可能性、北内郭主軸（夏至・冬至の日出・

日入の方向に一致）にみる天文伝播の可能性等からも公的な市が存在したと思われる。それとは別に、生活に必要な余剰物品、あるいは特定な用途をもつ特産物等と交換する日常的な市があった。そして、貯蔵する穀物や様々な産品が船によって運搬されるほど量が増え、掘立柱形式の高床倉庫が設けられる等、重層的な構造を持つ集落に発展した。この時期が、吉野ヶ里集落の最盛期にあたる。

古墳時代になると、吉野ヶ里集落群は減少し、有明海に半島状に突き出した佐賀郡諸富町一帯に集落が移り増加した。この時期に吉野ヶ里集落群は、衰退したと思われる（七田 2005）。

私は、吉野ヶ里集落が長期間存続した背景には自然条件が整っていたことと、環濠集落は、共同の土木作業から成り立ち、それに伴い、団結力と分業、権力者の存在がピラミッド社会を形成し、確立したことによると思う。

4. おわりに

吉野ヶ里歴史公園のスタッフによれば、これからも発掘と整備が続くとのこと。どんな環濠集落の新たな発見があるか楽しみである。今度は、ぜひ吉野ヶ里歴史公園だけを見学する旅を計画しようと思っている。

昨年 4 月、考古学概説から始まり、自分の知識のなさに閉口しながらでしたが、歴史や遺跡に興味を導いてくださった地底の森ミュージアムの企画と皆様に感謝申し上げます。

引用・参考文献

石川日出志 2010『シリーズ日本古代史 1 農耕社会の成立』 岩波新書

鎌田和宏監修 2012『ビジュアル大図鑑 歴史人物・文化遺産① 縄文・弥生時代』 小学館

七田忠明 2005『日本の遺跡 2 吉野ヶ里遺跡―復元された弥生大集落―』 同成社

古川清行 2009『読む日本の歴史 日本をつくった人びとと文化遺産① 原始の日本をさぐる』 あすなる書房
『吉野ヶ里歴史公園パンフレット』



写真 1 墳丘墓



写真 4 南内郭 竪穴住居群



写真 2 甕棺



写真 5 城柵で囲まれた南内郭



写真 3 甕棺



写真 6 南内郭・内環濠に囲まれた身分の高い人々の居住空間



写真 7 南内郭（手前）から見た北内閣（奥）



写真 1 0 南内郭から見た日常的な市の場所



写真 8 北内郭 内環濠



写真 1 1 北内郭 物見櫓



写真 9 北内郭 祭祀の場・政治の場



写真 1 2 北内郭 掘立柱式の高床建物

日本へやって来た人々

裏川久美子

1. はじめに

日本人はどのような人々の成り立ちの上で形成されてきたのか。日本列島が大陸と地続きの時代から、どのように人々が移動してきたのか。また日本列島が大陸から切り離された縄文時代を経て弥生時代へと移行して行く時期に、全く違った文化に取って代わられた印象を受けるが、その時に、どんな人々が、どのような影響力を持って、なぜ日本にやって来たのかを、日本国内からだけではなく、東アジア全体の視点から、国々の分裂や統一等の政治的変化、そして環境の変化もわかる年表のような形にして調べてみたいと思った。松木武彦氏の『列島創世記』の年表を元に時系列で、環境史と東アジア史等必要と思われる情報をいくつかの文献からピックアップしてみた。

2. 方法

3. 調査の成果

①後期旧石器時代前半

(約 40,000 年前～ 29,000 年前)



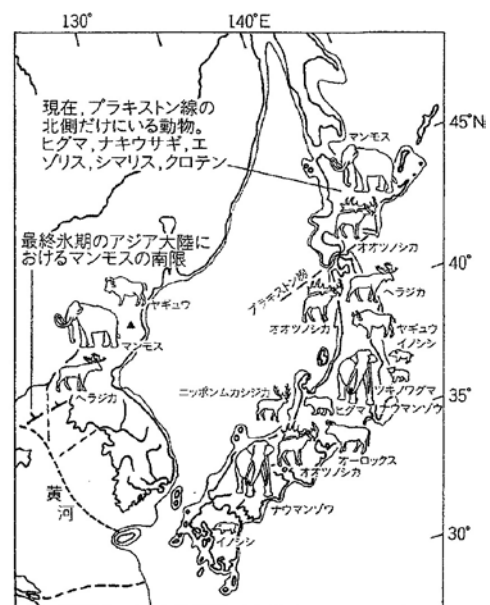
第1図 更新世後期の氷河期 (2万年前 片山 2013)

環境：「更新世の頃にくり返し訪れた氷河時代、日本周辺は、最大で 120 m 海水準が低下、ところにより、大陸と地続きか、またはそれに近い状態であった。そのような状態は約 50 万年前、約 10 万年近く前、約 2 万年前にそれぞれあった(第1図)。約 7 万年前以降、大陸とサハリン及び北海道が陸橋によってつながった低界面期プリミゲニウスゾウを代表種とするマンモス動物群の移入(第2図)があった。同時にそれらを狩猟対象としていた人間も移動してきた」(白石太 2002)。

例えば朴氏は、日本列島へ移動してきた人々のルーツを4つにまとめている(朴 1988)。

1. 北方回りの人々

移動する動物を追い北へ移動した人々の中ではベーリング海を渡るが、ロッキーマウンテンに阻まれる難関を避けた一部の人々は、カムチャッカ半島を下り千島列島伝



第2図 最終氷期の北海道と日本列島にいた主な動物 (百々 1995)

いに南下して、サハリン、北海道を
つて奥羽地方に流れ込んだ集団もいたが、
数としては多くない。

2. 北西からの人々

ある集団は、北上の途中、アムール河
の河口あたりからサハリンに渡った後奥
羽地方へ南下した。北回りの人々の中
には、今のスラブ族の祖先と混血を繰
り返した群れもいたが、主流はやはり
蒙古系アジア人であった。アイヌの人
々はこれらの北方回りと北西からの人
々の後裔である。

3. 韓半島からの人々

今の慶州南道と陸続きだった日本列
島に韓半島から多くの人々が流入して
きた。彼らは九州から本州の方へ北上
して、北から南下する群れと出会う。

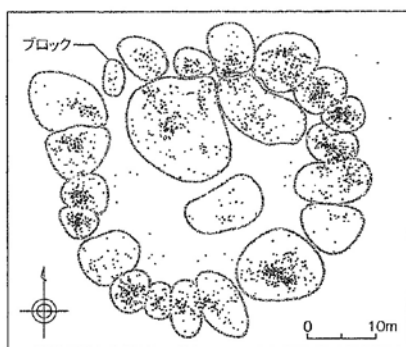
4. 南方からの人々

最終氷期の海水準が低い時期に、中国
の南部から台湾島や沖縄諸島の狭い海
域をやって来るのは難しくはない。

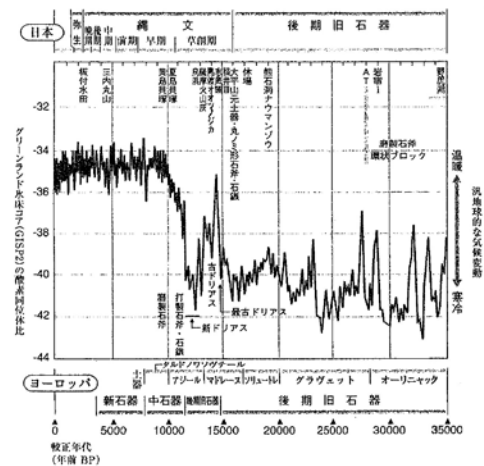
片山氏は、本州域の旧石器時代人は、
特定の地域からやって来たのではなく
広くアジアの大陸部から「吹きだまり」
のように日本列島に集まって来た可能
性が強いとしている。

おそらく、移動しやすい主なルートも
あったのだろうが、海水準が低い時期
においては、あらゆるルートの可能性
も考えられると言うことではないだろう
か。

●環状ブロック群
群馬県赤松町の下触牛遺跡では、石器やそれ
をつくるための石くずが環状に分布して見つか
った。そこから、二万年前の人びとの生活場所
を示すブロックや、それが複数つながったプロ
ック群が、環を描いて並ぶことがわかる。



第3図 環状ブロック群 (松木 2007)



第4図 グリーンランド氷床コアの酸素同位体比から
みた気候の変化 (白石 2002)

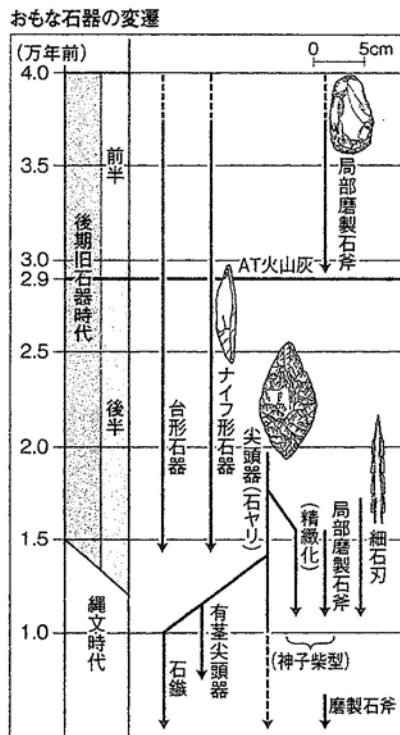
日本：「この頃、最古の石器がつくられる。
長野県信濃町の野尻湖周辺で、ナウマンゾウ
とオオツノジカの狩猟解体が行われる。石器
が広く使われ局部磨製石器が現れる。一時的
なキャンプ地として環状ブロック (第3図)
が営まれる (松木 2007)。

「旧石器時代人は日本各地で広く分布して
おり、遺跡はおおよそ 5000 ケ所以上確認され
ている。人々は、少人数のグループ (血族や
縁族) で遊動を繰り返し狩猟採集生活を送っ
ていた」 (片山 2013)

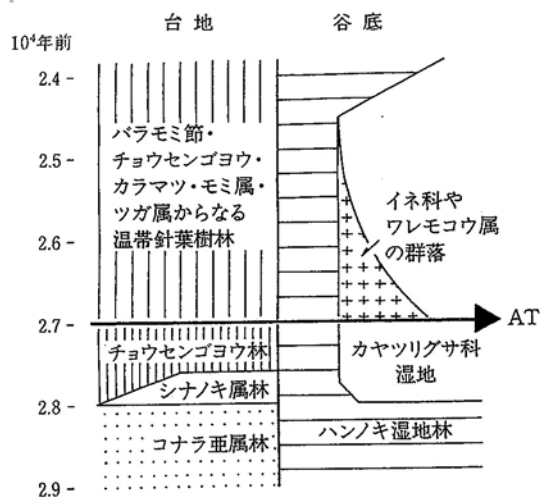
②後期旧石器時代後半

(29,000 年前～ 15,000 年前)

環境：「約 2 万 7 000 年前、日本列島の全域
に真っ白な火山灰、始良 Tn 火山灰を降らせ
た巨大噴火があった。現在の鹿児島湾北部の
始良カルデラの噴出した膨大な火砕流がシラ
ス台地となっている。火山灰 (AT) は、日
本列島全域に生態系に影響を与えた。植生
の際立った変化 (第6図) は、それを基盤に
する動物群や人間社会に多大な影響を及ぼし
た。降灰前は列島内に広く分布していた石器
群であったが、降灰後は地域によって特徴
の違う石器群に変化した (第5図)。寒冷気
候となり約 2 万年近く前、現在より 120m
も海水準が下がっていた北の間宮、宗谷海峡に



第5図 主な石器の変遷 (松木 2007)



第6図 始良 Tn 火山灰 (AT) の降灰による植生の変化 (白石太 2002)

は、陸橋が形成され大陸との唯一の掛け橋となった」(白石太 2002)。

日本：「温暖化のため (第4図)、ナウマンゾウ、オオツノジカなどの大型獣が消滅していき、シカ、イノシシ、ウサギ等の中小動物を獲物とする。これに応じて、尖頭器、細石刃(細石器)等様々な石器、大型の石ヤリや石斧が



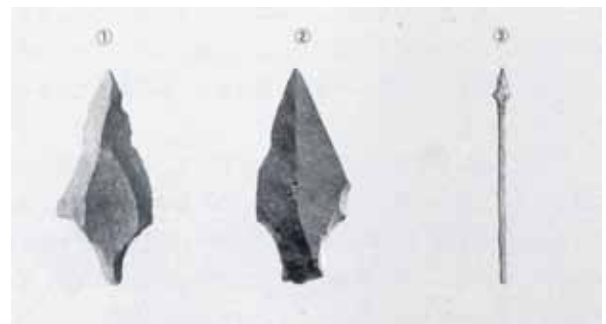
第7図 港川人の複顔 (植原 1997)

登場する。(神子柴型石器)」(松木 2007)。

この頃、「朝鮮半島や日本列島の人々とはとても良く似た剥片尖頭器 (第8図) を使っていた。(朝鮮半島の丹陽垂陽介遺跡と鹿児島県前山遺跡) (歴史教育者協議会 2006)。

旧石器時代人：「港川人 (第7図) は 1 万 8000 年前に生存し、その後の縄文人に共通する特徴を持っている。中国南部の柳江人や東南アジアで発見された骨によく似ているが、北部の山頂洞人とはかなり違っている。港川人を始めとする日本の旧石器時代人のルーツは中国南部から東南アジアにかけての地域という可能性が高い」(植原 1997)。

一方で、「港川人骨は琉球諸島に限定されるため日本列島旧石器人の代表とみなすのは難しく縄文人南方説は考え直す必要がある」(片山 2013)。



第8図旧石器時代後期に使われた剥片尖頭器 (歴史教育者協議会 2006)

これからの本州での化石人骨の発見が明確な答えを出してくれることであろう。

③縄文時代草創期

(約 15,000 年前～ 11,000 年前)

環境：「約 1 万 5000 年前に急速な温暖化が始まり、急激な海面の上昇(海進)をもたらし、生態系に影響を与えた。針葉樹の多い森林から落葉広葉樹林へと変化し、クリやドングリが澱粉供給源として利用できた。木材資源としても重要となる。約 1 万 3000 年前から 1 万 1000 年前頃まで「ヤンガー・ドリラス期」(第 9 図) と呼ぶ寒の戻りがあり、旧石器時代のような狩猟を糧とする生活に戻る」(白石太 2002)。

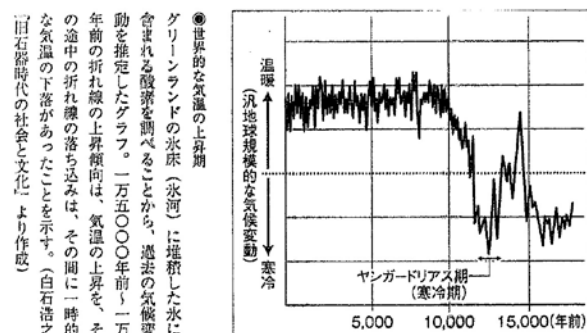
日本：「九州から東北まで無文や隆線文の土器が使われる。九州で竪穴住居やドングリ貯蔵穴ができ、調理道具も使われ定住が始まる。石やりから弓矢へと狩猟形態が変わる」(松木 2007)。

④縄文時代早期

(約 11,000 年前～ 7,000 年前)

環境：再び温暖化してくる (第 4 図)。8000 年前には朝鮮半島と日本列島の間が大きく分離された。

東アジア—中国、朝鮮半島：8000 年前 韓国新石器文化始まる。



第 9 図 世界的な気温の上昇 (松木 2007)

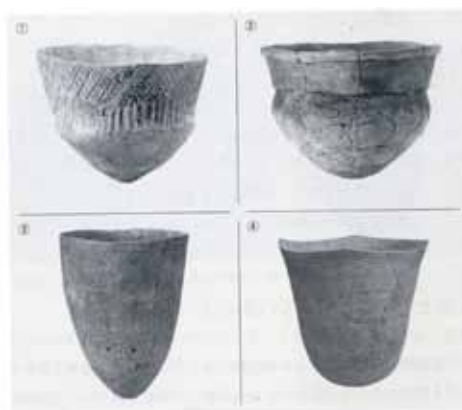
「朝鮮半島と日本列島で双子のように似た土器、隆起文土器と轟式土器が作られた。またその後に作られた櫛目文土器と曾畑式土器(第 10 図) もセットのように似ている。櫛目文土器は韓国南岸と九州から集中的に出土していて、対馬から出土する 90%が朝鮮系櫛目文土器である。また九州産の黒曜石が釜山東三洞で見つかる」(歴史教育者協議会 2006)。

この頃から朝鮮半島と九州間で交流あったことがわかる。

7000 年前 長江下流域で稲作始まる(河姆渡遺跡)。「抜歯風習は大汾口文化期で大いに栄えた後 4000 年前には廃れる。その後、山東半島あたりの大汾口文化の遺跡から 500 体以上もの抜歯人骨が出てくる。渡来民にも、縄文人とは違った独特の抜歯風習があった」(池橋 2008)。

日本：「定住が広まる。(鹿児島県上野原遺跡) 生産活動には使わないフィギュアが作られる。貝塚が出現。(神奈川県夏島) イヌの飼育が始まる。環状集落が形成される。(東京都恋ヶ窪遺跡)」(松木 2007)。

縄文早期人：「一般に小柄で、顔面はとても低く下顎が小さく、四肢骨は長さの割に細くコンパクトとなっている」(百々 1995)。



第 10 図 韓国と日本の新石器時代土器
(歴史教育者協議会 2006)

⑤縄文時代前期

(7,000 年前～ 5,500 年前)

環境：「温暖化（平均気温は今より 1—2℃ 高い）ため約 6000 年前には、海面が現在より 3m 前後も高くなったとされる（第 13 図）。日本列島を取り巻くように現在と同じような勢力の強い暖流が流れるようになった。海進により、暖流系の豊富な海洋資源がもたらされ、東北地方の東岸や北海道では、暖流と北からの寒流によってもたらされる資源が混合する良好な漁場をつくる」（白石太 2002）

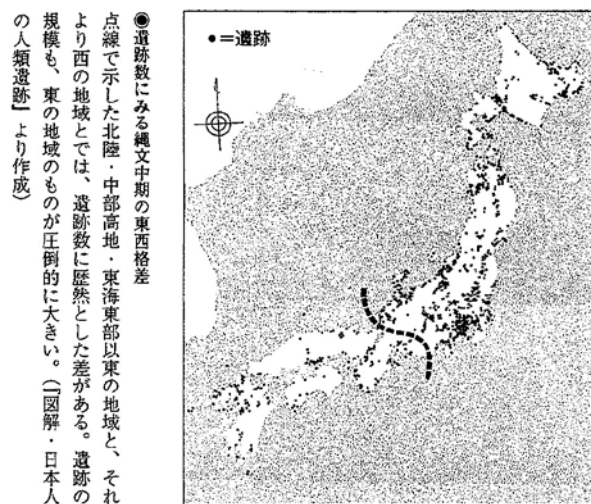
日本：「気候が更に温暖化し、東日本を中心に人口が増える。狩猟や収穫、加工、貯蔵の技術が発達する。（狩猟具、植物栽培等）大規模な集落の出現（青森県三内丸山遺跡）貝塚が広く分布する。九州で朝鮮半島と関係のある曾畑式土器が作られる」（松木 2007）。

⑥縄文時代中期

(約 5,500 年前～ 4,500 年前)

東アジア—中国：仰韻文化（6000 年前—4000 年前）黄河上、中流域に栄えた新石器文化 彩文土器

4500 年前殷王朝が成立。龍山文化盛んになる。



第 11 図 遺跡数にみる縄文中期の東西格差（松木 2007）

日本：「関東、甲信越、東北地方に、環状集落や環状貝塚が多数作られる（第 11 図 岩手県西田遺跡、千葉県加曾利貝塚）。関東、甲信越、東北南部地方で土器の装飾が派手になる。東日本を中心として地域や集団のアイデンティティと結びついた濃厚なメッセージが土器に託される（第 12 図）」（松木 2007）。

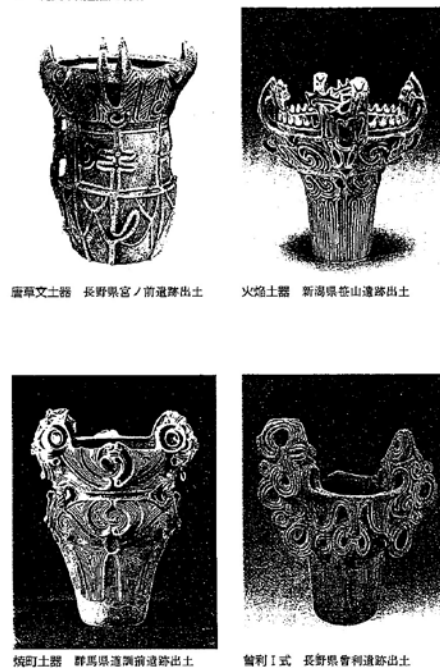
縄文中期人：「早期人の著しい低い顔面からやや面長に変わっている。体全体も小柄でコンパクトからやや太柄で骨太に変化する。これは、後氷期に起こった気候変動による生活様式や栄養状態の変化が影響しているかもしれない」（百々 1995）。

⑦縄文時代後期

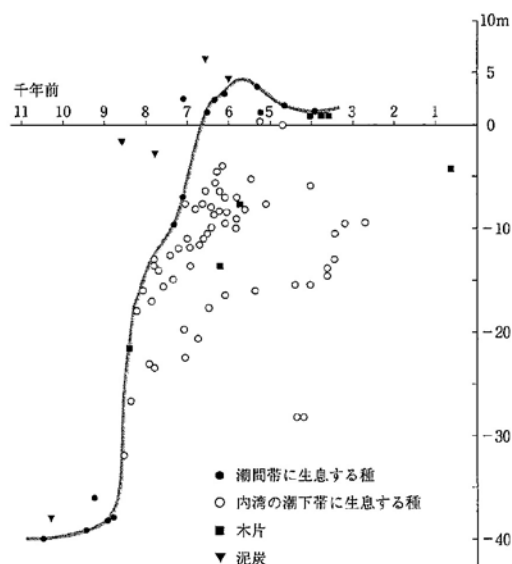
(約 4500 年前～ 3,200 年前)

環境：「縄文海進が最盛期を迎えた後、約 4000 年前を境に海は急速に後退し（第 13 図）、遠浅の海底は干上がって広大な陸地と化していった所には森林が形成される。これは、地球規模での気候の寒冷化によるもので、海の後退（海退）があり（第 13 図）、

●縄文中期土器の傑作



第 12 図 縄文中期の土器の傑作（今村 2002）



第13図 完新世における海面の上昇（今村 2002）

日本列島に沿って北上する暖流の勢いも衰えた。ハマグリ等の暖海性の貝類の分布が南下した。海退と暖流の勢力の衰えは、環境変動の歴史からみると過去1万年間の温暖な間氷期を2分するほどの大きな出来事である。海退期に入ってから気候環境は寒冷化とともに降水量が多くなる」（白石 2002）。「約3500年前、地球全体の気温が約3℃低下し、ツンドラ地帯が拡大し植生の限界が下がり民族大移動が起こる。一部のモンゴロイドも日本列島へ渡来した」（歴史の謎を探る会編 1991）。

東アジア—中国：竜山文化（4600年前—3500年前）

黄河中、下流域、新石器時代後期の文化・黒陶文化

日本：「東日本を中心に環状列石（秋田県大湯遺跡）や周提墓（北海道キウス2号）がつくられる。環状集落が衰退していく。精製土器と煮炊き用の粗製土器がつくられる」（松木 2007）。

「環境が大きく変わりそれまで頼っていた食料がとれなくなり、小規模集団（10—20

●増加した西日本の人口
縄文中期と後期との間に、東北から東海までの各地では人口が減少しているのに対し、近畿から九州までの各地では逆に増加している。（泉 拓良「縄文社会の限界」より作成）

時代区分	縄文早期	縄文前期	縄文中期	縄文後期	弥生時代
東北	0.03	0.29	0.71	0.66	0.50
関東	0.31	1.30	3.00	1.60	3.20
北陸	0.01	0.17	1.00	0.64	0.85
中部	0.12	0.91	2.59	0.79	3.07
東海	0.19	0.40	1.06	0.61	4.50
近畿	0.00	0.05	0.08	0.13	3.33
中国	0.02	0.04	0.04	0.08	1.80
四国	0.03	0.02	0.01	0.14	1.61
九州	0.05	0.14	0.13	0.24	1.56
全国 (北海道を除く)	0.07	0.36	0.89	0.55	2.04

第14図 増加した西日本の人口

人）で暮らすようになる。中期まで増えすぎた人口と寒冷化による環境悪化した関東から資源にゆとりのある西日本へ人々の流れが生じた可能性が高い（第14図）。また縄文時代後期、晩期に、人口が増えなかった理由としては、集団が小さくなると近親交配状態に近く、有害な遺伝子により死亡率が高くなったり、大勢の渡来人と共に結核菌が伝播され、免疫を持たなかった在来縄文系の人々が被害を受けたりしたからである」（池橋 2008）。

⑧縄文時代晩期

（約3,200年前～2,800年前）

東アジア—中国、朝鮮半島

前1050年 殷が滅び、周が起こる。

「前1000年頃から、長江の河口付近に住んでいた稲作民は、呉と越に分かれ戦っていた。呉越戦争の結果、呉は敗れ追放された民の多くは大陸沿岸地域を北上し、山東半島を経て朝鮮半島へ渡ってきた。彼らは、稲作に適した地を求めて、主に西南海岸地帯を開拓、世界的な規模の支石墓遺跡を残した。その一部が海を渡り、九州北部まで進出して日本で農業革命を起こした弥生人となる。初期の弥生人は九州北部に支石墓文化とともに稲作と青銅器文化を開花させた。「魏略」には、倭人を呉の始祖、太伯の子孫と記してある」（金 2011）。

「興味深いことに、前1000年の朝鮮半島

南部の東三洞遺蹟の第2、第3層から縄文土器が出土していることで、日本列島とも交流があったことがわかる」(澤田 1994)。

当時国境のない時代、我々が考えている以上に、自由に新天地を求めて縄文人も含めた人々が相互に往来していたのであろう。

前 800 年 周が洛陽に遷都し春秋時代始まる。

「大陸からアルタイ語を使う人々が遼河付近より韓半島の西海岸に沿って南下した。一方これとは別に中央ユーラシアのスキタイ地域からの人々がシベリア付近を経て韓半島東部に入ってきた。特に中国大陆で起きた春秋戦国時代の戦乱は、民族移動を加速化させ、その一部が朝鮮半島を経て日本列島へと流入する。それらとは別に、大陸東北部満州の吉林省に本拠を置いた扶余系の騎馬遊牧民族の南下もあった。このように朝鮮半島は、ユーラシア大陸諸民族の融合場所となった」(金 2011)。

以上のようなことから、寒冷化により南下した人々や、戦争難民の一部の人々が、そのまま日本列島へ渡って来たとしても何ら不思議なことはないと思う。

日本：「東北地方に複雑な文様と精巧なつくりの亀ヶ岡式土器が出てくる。遮光器土偶が作られる。東北地方に中国製の青銅刀が沖縄に明刀銭が伝わる等、各地で大陸との交流があり様々な文化が伝わる」(松木 2007)。

池橋氏によると、「縄文晩期には、北部九州で、かなり完成された形で水稲稲作が開始されていて、灌漑水路の後や農具が発掘された。(菜畑遺跡) 朝鮮半島からきた稲作民にとっては、適地があれば入植して、新しい集落を作ることは難しくなかった。北部九州にやってきた水稲耕作集団は、土着の縄文集団の少ない沿岸低地で水田を作り始めた。狩猟採集と多少の原始農耕で生活している縄文人にとって、沿岸の低湿地は必要な土地ではな

く、渡来人達が住み着く上で摩擦はなかったのではないかとしている。渡来人たちは縄文人たちと人的、文化的交流を持ちながら水田耕作を細々と始め、後族集団も加え 2 代 3 代と人口と水田域を増やし、やがて丘陵部や山際など土着系住民の生活領域まで侵入していったのではないか」(池橋 2008) としている。

「縄文時代から弥生時代への移行は、寒冷化期に入ってしばらく経った縄文時代後半に、東日本を中心として動植物資源が減退したため、集団で定着する社会から個人や小集団で資源を求めて動く機動的な社会へと変わった。このような社会のもとで西日本の多くの集団が朝鮮半島から渡ってきた水稲農耕の文化を取り入れた」(松木 2007)。

⑨弥生時代前期

(前 8 世紀～前 4 世紀半ば)

環境：「寒冷期(弥生の小海退) 弥生時代を通しての気候と海面変動を「弥生変動」と呼ぶ。小刻みな「弥生変動」(第 16 図)は、日本海側を流れる対馬暖流、そして黄河から流れ出る寒冷水の流れ方や勢いに深く関わっている」(白石太 2002)。「この小海退期に低湿地、海岸平野が拡大し、その状態が水稲生育の範囲内であれば水稲栽培は拡大する」(吉野 2011)。

東アジア—中国・朝鮮：春秋時代(前 770—前 403) 戦国時代(前 403—前 221) 鉄



第 15 図 渡来系弥生人と在来系(縄文系)弥生人 (埴原 1997)

が普及し農耕が飛躍的に発展する。

「長江流域に起源した水田稲作は春秋時代（前 6—5 世紀）、呉と越という強国を支えた。前 334 年の越の敗亡の 200 年前ぐらいから、呉、越の勢力は北上し、朝鮮半島、日本へと達していた。国や国境の観念もない時期に朝鮮半島の南部から九州北部にかけて、稲作渡来民の入植や交易があった。初期の歴史書の倭という集団は、朝鮮南西部から北部九州にかけての稲作渡来民であるという可能性はある。朝鮮半島には南部の水田稲作民と、機動力の優れた遊牧民の支配者からなる二重の文化があった」（池橋 2008）。

「前 3,4 世紀頃、中国大陸は大戦乱の時期で多くの人々が朝鮮半島に入り込み、トコロテン式に朝鮮半島にいた稲作民が日本列島に渡り新天地を開拓する。その後を追うように騎馬戦術に長けた集団が日本に渡り農耕社会を支配する。「記紀」は、征服者の首長を天つ神、先に定着した稲作民の首長を国つ神と呼んでいる。稲作民にとって豊富な水と温暖な日本列島は魅力があり、騎馬民族にとって生産性の高い稲作民社会はよい狩場であった。初期の開拓者は、同郷同士で分国を作り、新天地日本列島で勢力を拡張する」（金 2011）。

日本：「北部九州に朝鮮半島からの渡来者が流入。水稻農耕が行われる。（佐賀県菜畑遺跡）北部九州に大規模な環濠集落が出来、以後西日本に広がる。北部九州で人口増に伴い、ム



第 17 図 日本列島における水田稲作を伴う弥生文化の東進年代（吉野 2011）

ラ同士の戦いが激化。北部九州に鉄器の普及が始まる。東北地方でも稲作が行われる。（弘前市砂沢遺跡）遠賀川系土器が広く分布」（松木 2007）。

「弥生時代前期には稲作と金属器が伝わり、後半には、立屋式土器文化が約 200 年の短期間の内に近畿地方、伊勢湾岸地域にまで波及した。その後東北地方の北端まで約 400 年かかった（第 17 図）」（吉野 2011）。

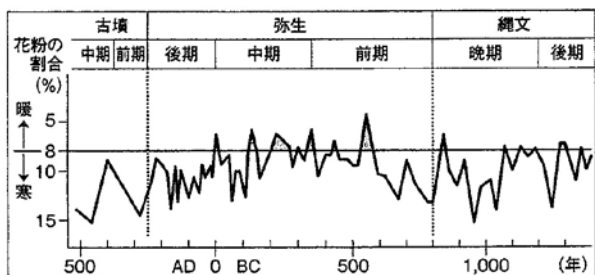
弥生人：「北部九州の弥生人と長江下流域から出土した男性人骨とよく似ている。低、広顔の縄文人とは対照的に弥生人は、高顔、高身長であった。顔幅も広く、眼窩は丸みを帯び鼻根部やその周辺が扁平でのっぺりした面長な顔つきに一変している」（白石太 2002）。

⑩弥生時代中期

（前 4 世紀半ば～紀元前後）

東アジアー中国・朝鮮：「前 221 年 中国を征服した始皇帝は不老長寿の霊薬を求めている。それを利用した徐福は 3000 人の童男女を乗せ東方へ船出してそのまま帰らなかったという。日本には徐福渡来伝説地が 20 ヶ所あるという」（澤田 1994）。

その 3000 人のうちの一部が日本に上陸して、住み着いても何ら不思議なことはないと思われる。



第 16 図 花粉の割合からみた寒暖の変動（松木 2007）

「この時代に中国の周辺諸国に対する間接統治政策である、中国を頂点とする冊封朝貢体制ができた」（歴史教育者協議会 2006）。

前 100 年 高句麗興る。

前 60 年 前漢、匈奴を滅ぼし西域都護を置く。

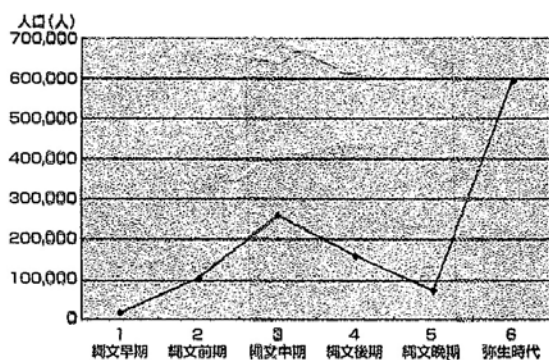
日本：「北部九州では、前漢鏡を副葬した大酋長の墓が出現（福岡県須玖岡本、三雲南小路遺跡）九州で銅剣、銅矛など武器型青銅器が、近畿地方では銅鐸が鋳造され、これらによる祭祀が行われる。北部九州に鉄器が広く普及。中期の終わり頃から、瀬戸内海地方に高地性集落ができる。（八堂山遺跡、紫雲出山遺跡等）南島の貝殻が九州—本州—北海道まで伝わる「貝の道」ができる。この頃倭

『後漢書』東夷伝が記す「倭国大乱」の時代、瀬戸内海沿岸を中心に戦乱の跡を示す高地性集落が次々に築かれた。

第 18 図 倭国大乱頃の高地性集落（宮崎 2011）

弥生人：「縄文時代を通じて日本列島の人口は多くても 20 万人を超える程度で人々の特徴もかなり似通っていたが（第 20 図）、弥生時代中期には、人口も 60 万人と伸び、北

19 図 武帝の領土拡大政策と朝鮮四郡（宮崎 2011）



第20図 先史時代の人口 (池橋 2008)

九州から身長が高く顔は長く、歯のかみ合わせがはさみ状になった人骨の出土が急激に増加した。しかし、南九州から琉球地方にかけてと、東北地方から北ではこのような特徴の変化が見られない。これを「日本人の二重構造論」と言う。(埴原氏は、基層集団として縄文人がいて、渡来人が縄文人を同化吸収し日本列島に拡散し、それが本土の日本人の祖先集団となっているとしている) このことから西日本を中心に稲作渡来民によって生活様式や人間集団の特徴に入れ換えに近いことが起こった」(池橋 2008)。

「水稻耕作を主生業とする渡来人が北部九州に定着し、ある程度は縄文系住人との遺伝的交流を経て急激に人口を増やし弥生社会を作り上げていった。弥生中期頃に北九州で集中的に出土する人骨は、ほとんど大陸の人の特徴に近いという。縄文人の特徴を持つ者は10—20%である。中間型はない。北部九州では、弥生前期のうちに、平野部から丘陵部までぎっしりと高密度に遺跡が分布するようになり人口が急激に増えた。水田耕作が狩猟、採集に代わるような高い生産性を持った農耕であったことがわかる」(池橋 2008 第20図)。

中間型があまりないということから、弥生文化は、ほとんど渡来民によってつくられたものと言ってもいいのではないだろうか。

⑪弥生時代後期

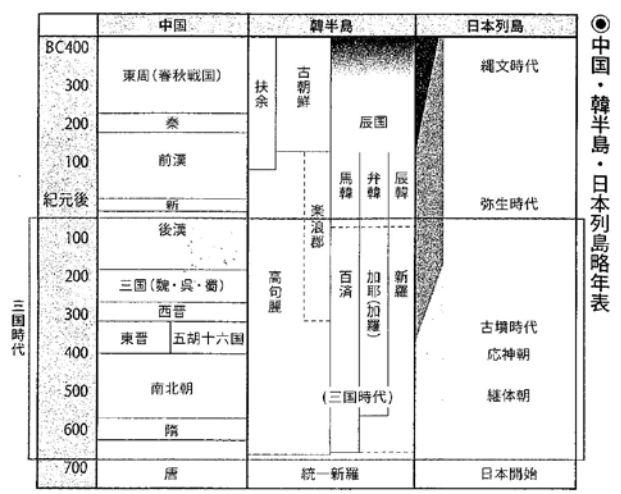
(紀元前後～3世紀前半)

環境：「弥生時代後半、気候が寒冷化し、農業生産にも危機が訪れた。この寒冷化は、世界的なもので黄巾の乱などによる後漢の滅亡の要因ともなった」(宮崎 2011)。

東アジア—中国、朝鮮 (第21図)

- 8年 前漢が滅び新が興る。
- 25年 光武帝、後漢を興す。
- 36年 後漢の光武帝、中国を統一
- 48年 匈奴、南北に分裂し、南匈奴、後漢に服属
- 111年 扶余、楽浪郡を侵す。高句麗、後漢に朝貢。
- 184年 後漢、黄巾の乱起こる。
- 196年 曹操、屯田性をしく。
- 220年 曹操没。その子曹魏を興す。
- 221年 劉備、即位して蜀を興す。
- 222年 孫権、呉を興す。
- 238年 魏、楽浪、帯方の2郡を領土とする。

日本：「各地に新しいムラが出現する。(大阪府古曾部、芝谷、大阪府観音寺山遺跡、鳥取県妻木晩田、青谷上寺地遺跡) 鉄器が広く行き渡り石器が消滅していく。この頃から青銅器を用いた祭祀が衰退する地方がある。



第21図 中国・韓半島・日本列島略年表



1784年に志賀島で金印が出土し、『後漢書』の記述が正しいことが証明されたが、誰が賜った金印なのかについてはまだ謎に包まれている。

第22図 奴国と伊都国（宮崎 2011）

57年 倭の奴国王、後漢に朝貢し、光武帝から印綬を授けられる（「漢委奴国王」の金印）。

2世紀頃 各地に個性的な墳丘墓が出現（岡山県楯築、島根県西谷）」（松木 2007）。

「弥生時代前期から伊都国は、大陸文化の受け入れ口となる港湾国家として発展し、漢（帯方郡）の役人を常駐させていた（第22図）。弥生中期後葉には後漢の威光を後ろ盾として、狗奴国と共に一大部族国家として成長していた。2世紀初めには、帥升が後漢から倭の盟主として認められた。しかし、後漢は184年に起きた黄巾の乱によって混乱し、権威を失い始めていたため、後漢を後ろ盾としていた伊都国の権威の失墜を意味していた。伊都国に代わり、諸国が王となるための争いが強まる。

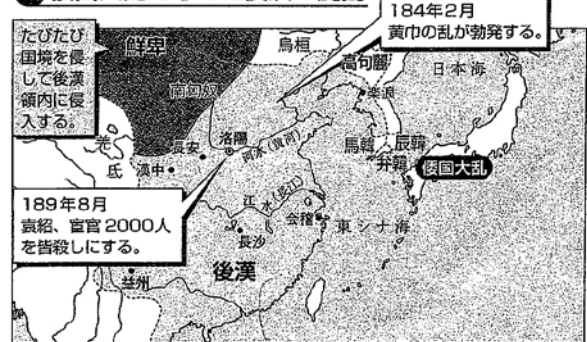
2世紀末頃 倭の諸国が卑弥呼を女王とする。

239年 卑弥呼は、大夫難称米を帯方郡に遣わし魏に朝貢を申し入れる。魏帝は卑弥呼を親魏倭王とし、金印、紫綬を与えた。

240年 卑弥呼 倭王に任命される。

卑弥呼は、倭国内の支配を有利にするため魏の後ろ盾を必要とした（第24図）。鉄の入手も必要であったため、中国勢力が朝鮮半島まで及んでいたことから、魏に忠誠を誓い鉄の交易路を確保した。又青銅器を用いた祭

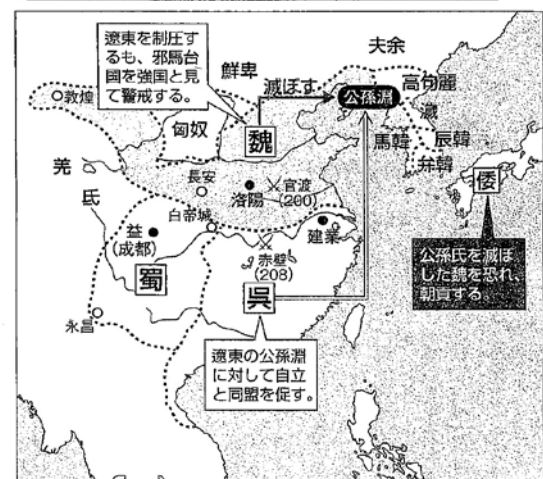
● 倭国大乱を呼んだ後漢の混乱



184年、後漢王朝が衰退し黄巾の乱が勃発。後漢王朝は崩壊へ向かう。これに伴い、後漢に朝貢しその権威を後ろ盾としていた奴国、伊都国の権威が失墜し、倭国内は混乱に陥る。倭国大乱には東アジアの情勢が密接に関わっていた。

第23図 倭国大乱を呼んだ後漢の混乱（宮崎 2011）

● 卑弥呼の遣使をもたらした東アジア勢力地図



卑弥呼の遣使の直前、遠東に割拠した公孫淵が魏によって滅ぼされた。結果、邪馬台国は魏の脅威に直面する。

第24図 卑弥呼の遣使をもたらした東アジア勢力地図（宮崎 2011）

祀の改革のため銅鏡の入手も必要であった。魏から卑弥呼へ銅鏡100枚が送られている。魏が卑弥呼を厚遇した理由としては、東シナ海を隔てた呉の背後には倭国があったため、倭国が呉と結びつくことを警戒するとともに、海上から呉を脅かす勢力として期待していた。邪馬台国の厚遇は対呉戦略の一環であった。

248年 卑弥呼没

「魏志」倭人伝によると、卑弥呼の死後男王が立てられたが 争いが起こり1000人以上の人が死んだ。そこで卑弥呼の宗女（同族の女性）である壺与という少女が王になり国

が治まった。壹与は親魏倭王の称号を引き継ぐ事を認められたが、それを最後に邪馬台国の記述は中国の史書から 150 年間姿を消す。この時代を「謎の 4 世紀」という」（宮崎 2011）。

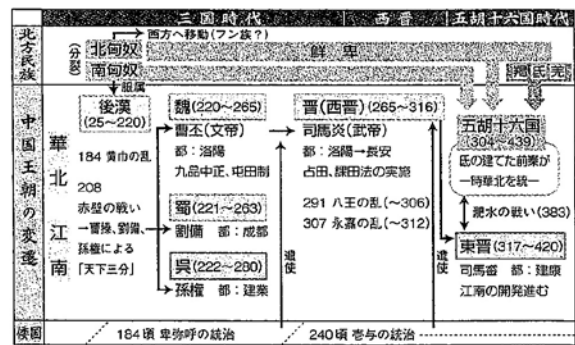
興味深いことに、金氏は、この謎の時代の渡来民の動きと、日本列島情勢について東アジアからの視点からわかりやすく捉えている。

「邪馬台国と対立する狗奴国が形成されたのは、紀元前 1 世紀頃で、百済の分国の性格を持つ。狗奴は邪馬台国と違い漢や魏に朝貢していないが、それは百済と魏が敵対していて狗奴が百済の分国だったからである。邪馬台国の卑弥呼と壹与が北朝の魏に 3 回も朝貢したのは、南朝と脈を通じる百済、狗奴を牽制するためであった。その後邪馬台国は狗奴国により滅亡したとみられる。

しかし、伽耶系である邪馬台国の残存勢力の一部が畿内（奈良）へ進出し先着していた新羅勢力を打破してヤマト（崇神王朝）を樹立した。農耕民族の移動は、戦争または政治的圧力によってなされる。畿内の伽耶系勢力ヤマトは急成長し勢力を蓄えるとその首長仲哀、第一期ヤマト王朝の最後の王が九州遠征を試みる。それは、残存する伽耶系勢力を助ける名目であるが、半島との鉄貿易ルートの確保が主目的であった。これがヤマトタケルによる「記紀」「景行紀」に度々登場する畿内勢力による熊襲（狗奴のこと）征伐の実体である。これが、狗奴の本国百済の応神勢力の渡来をもたらした」（金 2011）。

さらに、宮崎氏は、その後の邪馬台国について、中国との関係から捉えている。「普は、300 年頃から内乱により衰え、それに乗じて 313 年高句麗が帯方郡と楽浪郡を滅ぼす。邪馬台国にとって帯方郡の滅亡は、普との交易路を失うことを意味し、後ろ盾の普の衰えは邪馬台国の衰退につながった。こうした状況下 3 世紀に大和王権が台頭してくる。大

中国王朝の変遷—魏晉南北朝前期—



卑弥呼が使者を派遣した三國時代以降、中国は長きにわたる分裂状態に陥る。日本へまなざしを向ける余裕はなくなり、史書からも日本に関する記述は姿を消していく。

第 25 図 中国王朝の変遷—魏晉南北朝前期—
(宮崎 2011)

和王権の誕生には、中国情勢も関わっている。当時の中国では、異民族の五胡が中原（黄河流域）に侵入し、大規模な民族移動が起こった。これが、各地への騎馬民族の波及や部族の再編をもたらし、朝鮮三韓、大和などの王権が誕生したのである」（宮崎 2011）。

金氏は、又、渡来の移動の波は幾度もあり、朝鮮半島から日本列島への経路は大きく以下の 3 つに分けられる、としている（金 2011）。

- 1 朝鮮半島の西南部地域を経て九州北西部へ入る。（馬韓、百済系）
馬韓地域—肥の国（熊本）3 世紀狗奴国
4—5 世紀 江田舟山古墳を残した百済系の分国（植民地）があった。
- 2 朝鮮半島南海岸を経て九州北東部へ入る。（最も安全な航路）（弁韓、伽耶系）
3 世紀初め 帯方郡から南海岸に沿って東方向へ金海まで—対馬島—一大国（壹岐）—九州北部末盧国（現松浦）伽耶系の邪馬台国
- 3, 朝鮮半島東海岸を経て日本海に面した出雲地域への道 新羅系は主に東海岸から出発している。（辰韓、新羅系）この航路は、季節風や海流を利用し比較的簡単に往来が可能だった。出雲に最初に定着したのが新羅系、その後ケモス信仰を持つ扶余系、百

済系のスサノオの征服があり、さらにその後伽耶の高天原の勢力によるオオクニヌシの国譲りがあったと思われる。特に豊富な銅剣、銅鐸が大量出土するのは被征服者の制服者に対する怨念を象徴している。

以上のことから、日本列島への渡来は、朝鮮半島の三韓（馬韓、弁韓、辰韓）のそれぞれの利害関係が大きく関わっていたことがわかる（第 24 図）。

池橋氏は、この激動の戦乱の弥生時代を適格な例えで表現している。

「卑弥呼の時代の終わりの 240 年頃から、倭の五王の初めの 421 年頃までの 180 年ほどの歴史の変化は目まぐるしい。馬のない国から騎馬戦闘を行うまでとなり、巨大古墳の時代が変わった。ここで遊牧騎馬民が中国北部や朝鮮半島北部で支配力を発揮したことから、インカ帝国に侵入したスペインのピサロの一団が、100 名ほどの鉄の剣や槍を持った騎馬軍団によって馬を知らなかった数千人のインカ帝国の軍隊を制圧してしまった。騎馬軍団の威力は古今東西において絶大であった。彼らは騎馬という機動力と進んだ武器によって大きな支配力を発揮して高句麗のように征服国家を建てた。倭国でも古代の権力の拡大に馬の果たした役割は大きかったはずである」（池橋 2008）。

4. まとめ

旧石器時代に、大陸のあらゆる所から日本へ移入してきた人々が旧石器時代人となり、彼らが縄文人のルーツとなったと思われる。温暖化により、日本列島が大陸から分離されてからは、縄文人は一万年に渡り独自の豊かな文化を作り上げていった。彼らは日本列島内で、大体均質な特徴を持っていたと言われている（アイヌ民族に関しては別の機会に調べてみたい）。

縄文時代から弥生時代の移行期には、寒冷化或いは、東アジアでの争乱により敗れた

人々が、大陸から渡来民（南方系倭人、北方騎馬民族、漢人系等）として日本列島へやってきた。弥生文化を作った人々である。日本列島で地域差はあるようであるが、渡来民同士、或いは縄文人と混じり合い長い時間をかけて現代の日本人へとつながってきたことがわかる。

資料を調べていく中で、日本という国家を創った主たる人々は、稲作を広めた渡来民と鉄と馬を持ち込んだ騎馬民族であるという印象をますます強く持つようになった。東アジアとの関係性の中から日本という国家が成り立ってきたということも忘れてはならないことである。平和主義的な縄文人は、ある意味蚊帳の外に置かれ細々と生きてきたのではないだろうか。

それぞれの渡来民の集団には形質的な差異はあるけれど、元を遡れば、縄文人も含めて皆モンゴロイドで仲間だったわけである。元々仲間だった現在の東アジアの人々が平和的に生きていく術は、戦いの痕跡をあまり残していない縄文人から学ぶことがありそうである。

植原氏は、渡来の波を四段階に分けていて、第一段階を、弥生時代前期としている。予定では、第二段階である、渡来民が大量に押し寄せてきて、ヤマト政権が確立されていく古墳時代まで調べる予定であったが、今回は時間的制約もあり出来なかったのが、これからの課題としていきたい。わからない事が次から次へと出てきて收拾がつかなくなり、抜け落ちたりアンバランスな情報になってしまい不完全な年表になってしまったがご容赦願いたいと思う。このような学びの機会を与えて下さった地底の森の職員の方々には、感謝申し上げます。

※引用・参考資料

池橋 宏 2008 「序章」 「弥生文化はどこから来たか」 「朝鮮半島の稲作渡来民」 「稲作渡来民はどこに定着したか」 「日本人の中の渡来民」 『稲作渡来民』 講談社

今村啓爾 2002 『日本史リブレット2 縄文の豊かさと限界』 山川出版社

江上波夫・佐原真 1996 『騎馬民族は来た！来ない！』 小学館ライブラリー

大平 裕 2011 『日本古代史正解一渡海編』 講談社

沖浦和光 川上隆志 2008 『渡来の民と日本文化』 現代書館

金 容雲 2011 「境のいない時代」 『日本＝百済説－原型史観でみる日本事始め』 三五館

片山一道 2013 「日本列島の旧石器時代人の面影」 「日本人の原像を探る」 『骨考古学と身体史観－古人骨から探る日本列島の人々の歴史』 敬文社

佐原 真 1992 『体系日本の歴史1 日本人の誕生』 小学館ライブラリー

澤田洋太郎 1994 「朝鮮半島の歴史」 『伽耶は日本のルーツ』 新泉社

白石浩之 2002 「旧石器時代へのタイムトンネル」 『日本史リブレット1 旧石器時代の社会と文化』 山川出版社

白石太一郎 2002 「日本列島の環境史」 「倭人の形成」 『日本の時代史1 倭国誕生』 吉川弘文館

百々幸雄編 1995 「日本人の原像」 『モンゴロイドの地球3 日本人のなりたち』 東京大学出版会

朴 炳植 1988 「太古の日本列島住民」 『ヤマト渡来王朝の秘密』 三一書房

埴原和郎 平成9年 「日本人の顔」 「日本人の骨とルーツ」 『日本人のルーツ－二重構造モデル』 角川書店

松木武彦 2007 「海と森の一万年」 「西へ東へ」 「崇める人、戦う人」 「年表」 『日本の歴史1 列島創世記』 小学館

宮崎正勝 2011 「漢書、後漢書、三国志に登場する倭人」 『図説 地図とあらすじでわかる！倭国伝』 青春出版社

森 公章 2006 『戦争の日本史1 東アジアの動乱と倭国』 吉川弘文館

吉野正敏 2011 「古代以前の日本の姿」 「古代日本の気候と人々」 「東アジアとのかかわり」 『古代日本の気候と人々』 学生社

歴史教育者協議会(日本) 全国歴史教師の会(韓国) 編 2006 『向かい合う日本と韓国・朝鮮の歴史 前近代編上』 青木書店

歴史の謎を探る会編 1991 「3500年前民族は大移動していた」 『日本人の起源』

富沢遺跡周辺地域で先人たちが展開して来た暮らしの変遷

加藤 茂

1. はじめに

第 17 期市民文化財研究員の活動として、地底の森ミュージアムで学んだ考古学の基礎知識を基に、日本の歴史の出発点である旧石器時代から近世までの各時代の暮らしの特徴と、私たちも踏みしめている富沢遺跡とその周辺の大地を先人たちが長期にわたり生活展開の場として来た意義、変遷の歴史を、これまでの専門的な埋蔵文化財調査・研究の資料等を研鑽する中から辿ってみることにした。

2. 活動内容（2013 年 4 月～）

- ・主な遺跡の見学・現在の外観確認
旧石器時代：地底の森ミュージアム
縄文・弥生時代：山田上ノ台等富沢周辺遺跡
古墳時代：雷神山・飯野坂・遠見塚・兜塚古墳、愛宕山横穴墓群など
中世：岩切城跡、長命館跡など
近世：仙台城跡、鹿除土手など
- ・博物館等見学（常設展・特別展）
地底の森ミュージアム、仙台市博物館、東北歴史博物館、国立科学博物館など
- ・主な閲覧文献等＝後記のとおり

3. 成 果

- ・日本列島で先人たちが編み出してきた暮らしの変遷を①旧石器時代②縄文時代③弥生時代④古墳時代⑤古代⑥中世⑦近代に分け、各時代ごとの特徴・変遷を概括的に紹介した。その上で、仙台市内の主な遺跡の特徴と富沢遺跡周辺地域の遺跡の特徴等を集約した。
- ・仙台市内には 780 ほどの遺跡が確認されており、その多くは、河川に面した丘陵や河岸段丘・沖積地、海岸線に沿った浜堤などに

立地。水系ごとの遺跡数は、多い順に名取川、広瀬川、七北田川流域に分布している。

- ・富沢遺跡とその周辺遺跡は、名取川・広瀬川により形成の森・台地・低地に恵まれ、旧石器時代から縄文時代の採集・狩猟・漁撈生活に適した生態系があり、弥生時代以降近世に至る水田農耕とその他の生業を組み合わせた暮らしにも適地だったと考えられている。
- ・富沢遺跡には、約 20000 年前の後期旧石器時代の人々の生活痕などが遺され世界的にも貴重な遺跡と位置づけられている。

さらに、縄文時代の含有層、弥生時代・古墳時代の水田跡、中近世の水田・集落跡など各時代の遺跡、遺構が複合・重複して先人たちが創造した暮らしの跡が連綿と遺され、時空を超え現代につながる文化の源の地の一つとも言える。そして、各時代の人々が築き、育んできた暮らしの知恵の多くが、現代の日常にも深く根を張っていることに改めて驚きを感じているところである。

■旧石器時代：定住せず、移動する暮らし

- ・人類文化の基層ともいえる最古の時代。氷河期に当たり、世界では通常、「前期・中期・後期」の 3 期に区分。日本列島で存在が確認されているのは、約 30000 年前から約 12000 前まで続く後期旧石器時代から始まる。定住せずに、テント風の簡単な小屋等を住居として使い、食料を求め採集・狩猟・漁撈の適地を移動する生活。
- ・氷河期に当たり、植物相としてはグイマツ等の針葉樹林が多く分布。動物層としては、絶滅種のナウマンゾウやヤベオオツノシカ、野牛などが生息。
- ・土器を作らず石器と骨器を使用。石器は、

形態・用途で様々な器種に分類される。①打製石器～石核石器（礫器や握斧など）、剥片石器（ナイフ形石器・尖頭器・細石刃・搔器・削器・石斧など）。②磨製石器～磨製石斧。

・骨器は、野牛の肋骨を加工（岩手県花泉遺跡出土）。

○仙台市内の主な遺跡（太白区・若林区とその近隣地域に分布の遺跡＝以下同じ）

・市街地西部や北部に広がる河岸段丘上や沖積地を中心に遺跡が確認されている。

・富沢遺跡周辺では富沢・山田上ノ台・上ノ原山・川添東遺跡などが確認され、ナイフ形石器、彫刻刀、搔器、石器製作で生じるチップなどが出土。

○富沢遺跡（富沢・長町南・泉崎地域と近隣地域に分布の遺跡＝以下同じ）

・富沢遺跡は名取川・広瀬川により形成の自然堤防と北西の丘陵に囲まれた後背湿地を中心に立地。1988年に、約20000年前の後期旧石器時代の埋没針葉樹林や焚火跡、その周囲での石器製作跡、シカの糞、樹木・葉・球果類、昆虫などが出土。

・旧石器人と動物の生活痕と自然環境が発掘・保存され、「世界中でここだけ」の他に例のない発見と位置づけられている。

・生活痕は、焚火跡の炭のまとまりが1か所。剥がされた石器と、ハンマーストーンも出土。別の2地点からはナイフ形石器5点など調整加工のある石器10点など出土。狩猟活動の一時的な野営の地で、焚火を囲み石器製作などをした先人の生活痕と考えられている。

・約20000年前は氷河期の寒冷な時期に当り、海面は現在よりも約100m低く、当時の富沢の平均気温は現在より7～8℃低かったと推測されている。前記のシカの糞は20箇所以上から多いところでは100個以上のまとまりで出土。針葉樹中心の湿地林は動物たちが集まる越冬地で、先人たちの冬季の狩猟地だったと考えられている。

■縄文時代：定住し、土器も使う生活

・12000年前から2500年前に日本列島にあった文化。10000年間近く続き、「草創期・早期・前期・中期・後期・晩期」の6期に区分。

・気候は次第に温暖化。仙台市域の植物相は、ブナなどの落葉広葉樹林で組成。海面は、現在の海面高度付近に達した（縄文海進）。

・狩猟・漁撈・採集経済の中で定住生活を構築。農耕なしに定住する暮らしが長く続いたのは、世界でも珍しいことといわれる。

・土器を使い、食料を煮たり保存して食べる生活に。

・土器の特徴のまとまりを「型式」として、[草創期・早期・前期・中期・後期・晩期]の年代に区分される。

・石器の器種が増え、石槍・石族・石錘、打製石斧、磨製石斧、磨石、石皿などを使用。

・木製品・骨角器などでは、釣針・鈎・縄・編み籠・漆器を使用。

・祭祀用遺物では、土偶・土面・石剣・石棒など。装身具遺物では、管玉・勾玉・櫛・耳飾り・腕輪などを使用。

・住居・広場・墓・貯蔵穴・ゴミ捨て場などを備えた縄文社会の基本単位である集落（ムラ）が造られる。人々はムラに集まって住み、構成員同士の結びつきも強かったと考えられている。

・建物は、半地下式の竪穴住居（住居）と平地式の掘立柱建物（倉庫など）がある。

・周堤墓・環状列石墓・土坑墓・再葬墓などが形成された。

・三陸沿岸部と関東地方を中心に、大規模な貝塚が形成されていく。

○仙台市内の主な遺跡

・遺跡の大部分は集落跡であり、早期・前期の集落は河川の上流・中流域に、後期・晩期には中流・下流域に、中期の集落はほぼ全域にわたって分布する傾向にある。

・集落跡以外には墓や祭祀関係、獣道に仕掛けた落とし穴など狩猟に関わるものがある。

・名取川流域では、大規模な遺跡が多い。山田上ノ台遺跡からは、竪穴住居 38 棟出土。住居は台地に 2 群に分け配置、中央部は共同の広場に。住居の周囲には多数の食料貯蔵用のフラスコ状土坑や土器を焼いた土坑、粘土貯蔵用の土坑など発掘。

・富沢遺跡、下ノ内遺跡、大野田遺跡などでも竪穴住居跡、墓、配石遺構など発掘。

○仙台市内の主な遺物

・市内の縄文遺跡から出土する遺物の多くは土器である。草創期（野川遺跡）、早期（富沢遺跡など）、前期（北前遺跡など）、中期（山田上ノ台遺跡など）、後期（大野田遺跡など）、晩期（南小泉遺跡など）に時期区分される土器が出土。

・石器～磨製石斧、石匙、石垂（キリ）、磨（スリ）石・石皿、石篋（へう）・搔器など。

・生産用具～石鏃、石槍、鹿角製の釣針・鈎、魚網用の石錘など。

・装身具～石製耳飾、土製耳飾。硬玉製の垂飾品（ペンダント）など。サメの歯製の垂飾品など出土。

・祭祀用具～土偶が多い、大野田遺跡ではハート型土偶を主体に 300 点近く出土。イノシシ型土製品などが山口遺跡・大野田遺跡・王ノ壇遺跡から出土。

・市内での貝塚の遺跡は見つかっていないが、縄文時代の漁撈活動の痕跡として、大野田遺跡からは少量ながら漁具（鹿角製の鈎、ヤス、釣針、土製の錘、浮き）、魚骨（タイ、カワハギ、スズキ、サケ、コイなど）が出土。遺跡から名取川河口までは約 8 km であり、海とも深いかかわりのある生活が組まれていると考えられている。

○富沢遺跡

・縄文時代の遺物は、早期・前期・晩期の土器、石鏃・尖頭器・石匙・スクレイパー（搔器）などの石器が出土。28 次調査では早期後半の土器が 4 か所で検出。遺構は 30 次調査で住居跡の可能性のある竪穴遺構が 1 基発

見されている。

■弥生時代：水田稲作展開と、金属器使用

・弥生文化は、大陸から北九州に伝播し本州北端・津軽地方まで達した水田稲作文化。弥生文化の渡来ルートは、中国大陸から①朝鮮半島を経て②長江流域から直接③琉球諸島を経ての 3 つのルートが考えられているが、①朝鮮半島を経て北九州に伝わった可能性がより高いといわれている。

2600 年ほど前から 1750 年ほど前まで続いたと考えられている。通常、「前期・中期・後期」に区分。

・平野部中心に水田稲作を営む農耕集落ができ、中期には関東・東北地方まで広がる。中期後半には九州から関東まで各地に大規模な農耕集落が発達、集落の指導層の中から強い支配力を持つ首長層が各地に台頭したとみられている。

・後期には石器に替わって鉄器・青銅器が生産され、農耕具も発展し農業生産力が向上。集落間に力関係が生じ、農耕集落の地域的な統合が進み、古墳時代につながる。

○仙台市内の主な遺跡

・名取川・広瀬川流域では、弥生時代中期の遺跡分布密度が比較的高く、自然堤防や海岸線に沿う浜堤に集落や墓域、低地に水田跡が広がる。

・富沢、山口遺跡などでは水田や水路の跡が発見されている。最も古い段階のものは、富沢遺跡において中期初頭の畦・水路遺構が確認されている。南小泉・富沢・船渡前遺跡などでは前期弥生土器が出土。船渡前遺跡では前期後半の甕に刳圧痕が確認されている。

○富沢遺跡

・弥生時代の富沢遺跡の地は、泥炭質の粘土層の堆積が縄文時代から続き、地下水位が高い湿地だった。弥生時代中期以前から水田が作られ、水田は大畦畔（幅 1~2 m）と小畦畔（幅 30 ~ 50 cm）によって区画され、

一区画の面積は 5 ～ 30㎡ほどと小さかった。

- ・ 100 ヶ所を超える調査地点の水田や水路から木製の鍬、泥除け、鋤、堀棒などの農耕具が出土。このほか木製の竪杵・臼などの生活道具が出土。水田跡から、多数の人間の足跡が見つかった。
- ・ 土器は、大畦畔から壺や甕が一個体まとまって出土。
- ・ 石器は、石庖丁、石鍬、小型の剥片石器など。石鍬も各期で出土し、水田や湿地に来る鳥類などの小型動物を弓矢で狙ったと思われる。
- ・ [プラント・オパールと水田・畑跡調査]

プラント・オパールは、イネ科植物の葉に含まれるガラス質の細胞で、鋸の刃状に葉に付き植物が枯れても土の中に微化石として残り、植物の種類判定ができる。水田跡や畑跡の探査と確認などに富沢遺跡など多くの遺跡で活用されている。

○稲作と日本文化

- ・ 弥生時代から始まった稲作は、以降の時代の社会と文化の重要な成立基盤を作ってきたといえる。旧石器～縄文時代までは、採集・狩猟・漁撈を主体に自然と共に生活を営んできた人々が、自然に手を加え湿地を水田に変える農耕を始め、食料を「採る」から「作る」へと変化させ多くの農民になっていく。やがて、稲作と強く結びついた集団関係が形成され、農民の指導層から集団を支配するリーダーが出現。
- ・ 弥生時代中期後半には、九州から関東まで各地に大規模な農耕集落が発達。強い支配力を持つ首長層が各地に台頭したと見られる。
- ・ 古墳時代に引継がれ、有力豪族たちの権勢を象徴するような大規模な個人墳丘墓が東北南部まで及んで造られる。
- ・ 古代には、中央政権成立により公地公民を根幹とする律令国家の生産基盤となる。
- ・ 中世には関東平野などの新田開拓領主が武士として台頭。耕地の私有権を主張し、攻伐により農耕地を切り取り領地を広げ、公家本

位の律令体制を揺るがし、鎌倉幕府が武家政権を樹立する。

- ・ 近世には、徳川幕府が大名や武士の権威を水稻の穫れ高（石高）で数量化、幕藩体制の基盤とし、階級・身分制度までに及んだ。伊達藩も新田開発に力を注ぎ、産米を江戸に廻送。当時、江戸の米相場は仙台米の豊凶で決まったといわれる。

- ・ 近代に入っても、日本人の主食として開田・土地改良・品質改良により増産を重ねたが、1970 年台からは「米余り」で減反（生産調整）を余儀なくされ、昨今は、パン食の拡大、外国産米との競合や関税問題、減反政策の見直しなどで揺れているところ。

- ・ 一方では、稲作農耕の本格化と共に、豊作を祈り恵みに感謝し穀物を神と仰ぐ信仰が行われ、今なお広く受け継がれている。宮中の神聖行事の一つ「新嘗祭」（新穀を神々に捧げる神事）や伊勢神宮外宮の祭神が穀物神であること、同じく穀物神である稲荷神社の信仰などである。「瑞穂の国」と称されてきたように、日本人と米の 3000 年余の結びつきの深さを物語っているといえる。

■古墳時代：首長層台頭と、大規模墳墓造営

- ・ 3 世紀半ばから 7 世紀半ばまで 400 年ほど続く。支配階層の墓として、墳丘を持つ墓が造られた時代。水稻農耕を基礎として、大型古墳を造営できる有力階層が台頭。大規模な墳丘を持つ個人墓が九州から東北南部までの広い範囲で造られた。前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳などがある。

- ・ 時期区分は、おおむね「前期（4 世紀）・中期（5 世紀）・後期（6 世紀）・終末期（7 世紀）」に区分。

- ・ 古墳への副葬品として、人物・動物・家など様々な形の埴輪が作られた。

- ・ 古墳時代の文字の記録の出土は少ないが、中国文字から日本語を書く方法が開発されたと考えられている。

○仙台市内の主な遺跡

[墳墓]：古墳・周溝墓・横穴墓・など。

・古墳＝前方後円墳、円墳が主体。前方後方墳と方墳は知られていない。

前期の前方後円墳では、遠見塚古墳が知られている。中期後半には、円筒埴輪・人物などを伴う古墳が造られる。後期の古墳には、埴輪は急速に衰退し墳丘の規模も小さくなる。

・周溝墓＝前期から中期に小規模な溝で区画され、内部に低い墳丘を伴う。集落に隣接して造られる。藤田新田遺跡・戸ノ内遺跡などから出土。

・横穴墓＝終末期には、追葬可能な横穴墓が多く造られる。1箇所に多数の横穴墓が営まれる。広瀬川と名取川に挟まれた区域には、多数の横穴墓が分布。愛宕山から大年寺山にかけての地域は、東北地方有数の横穴墓群である。この中の大年寺山横穴墓群と愛宕山横穴墓群では、装飾横穴墓が確認されている。

・終末期の墳墓からは、副葬品が多数出土。須恵器、土師器、玉類。鉄刀、鉄族などの武器、馬具の副葬品も多い。中期には日本に乘馬の風習が伝わり、終末期には武装して馬に乗った武人たちの存在を示すようである。

[集落]：集落は、竪穴住居で構成。

・仙台市内の集落の多くは、自然堤防や浜堤あるいは沖積地を望む段丘上など、水田稲作に適した場所に隣接して立地。

・竪穴住居は、ほとんど方形で4本の柱を持つ。前期から中期には、住居の中心の地面で火を焚く地床炉が伴い、中期になると、住居内に造りつけのカマドが出現。

[生産遺跡]：水田跡、須恵器と埴輪の窯跡、鉄製品製作跡など。

・水田は、集落の周辺の後背湿地などで営まれ、富沢遺跡と鴻ノ巣遺跡などで出土。

・窯業生産遺跡としては、須恵器と埴輪の窯跡があり、三神峯丘陵周辺と、台原・小田原丘陵に立地。

○仙台市内出土の主な遺物：土師器、須恵器、木製品、鉄器など

[土師器]：土師器は、素焼の褐色の土器で、関東地方南部より西の地域の影響を受けて新たに成立したもの。

[須恵器]：須恵器は、青灰色の固く焼かれた土器で、中期に朝鮮半島から伝来の「登り窯」で焼かれた。集落からの出土は少なく、墳墓の副葬品など限られた範囲に供給されたものと思われる。

[石製品]：石器は消滅。石製の遺物は勾玉や紡錘車、砥石など限られたものになる。

[鉄器]：鉄器の使用が始まるが、鉄器の出土例は、墳墓の副葬品を除くと少なく、刀子や鉄斧がわずかに出土。

○富沢遺跡

・古墳時代の水田跡は、低地の中でもやや標高の高い傾斜の緩やかな平坦面に立地。「小区画水田」と呼ばれる一枚の水田区画が50㎡未満の小規模な水田区画の特徴を持つ。

・6～7世紀頃の水田跡は、水路を中心に長方形を基調とする小規模の区画が整然と並ぶ。面積は5～10㎡のことが多い。

・水路に伴う施設は、基幹水路の両岸及び補助水路に伴う畦畔に護岸用の杭が打たれている。水田面などから人間の足跡が多数発見。畦畔上から代掻きや稲株しずめの農具でヤマグワ製の足（31.1cm）が出土。

■古代：律令統一国家の成立

・時代区分は、7世紀後半古墳時代が終わり、平安時代後期の12世紀中頃まで。

・この時期の大半は律令制（律＝刑法、令＝行政規定）という中央集権的な政治体制下にあった。豪族たちが所有する土地を召し上げ、公平に分配する公地公民制を敷き、地方には国・郡・郷（里）という国の基礎となる行政組織が置かれ、それぞれに国司・郡司・里長等の役人が置かれた。

・役所の跡などから木簡や荷札、筆記用具と

見られるものが出土。律令制度下での文書主義の実態を伝えている。

- ・7世紀中頃に中央政権の陸奥国支配の最初の行政拠点としての官衙が太白区郡山地区に造られた。更に720年代になると、多賀城が造営。蝦夷の従属政策が大きな任務だった。
- ・6世紀中頃に伝わった仏教は、律令国家の庇護を受け国家仏教として発展し、多くの官立寺院が造営。7世紀末から8世紀初めに整備された郡山遺跡Ⅱ期官衙には付属寺院が設けられた。

○仙台市内の主な遺跡

- ・律令制による支配が拡大し、官立施設が置かれた。仙台平野一帯は、行政の中核施設や付随する寺院等が置かれ、陸奥国の中心的な役割を担った。

[集落跡]

- ・名取川・広瀬川流域では自然堤防上に多くの集落が進出。公地公民制に基づく律令村落と考えられている。

[生産遺跡]

- ・瓦・土器の生産を行った窯跡、稲その他農産物の生産を行った水田跡・条里跡・畑状遺構、鉄・銅等金属器の製造・鋳造を行った鍛冶遺跡があげられる。
- ・水田遺跡は、市南部の富沢・山口・郡山遺跡等で奈良～平安時代の水田跡が出土。

[官衙・寺院跡]

- ・官衙は7世紀中頃の陸奥の国建国に伴う郡山遺跡があり、これが国府多賀城へと継承される。寺院は郡山遺跡Ⅱ期官衙付属寺院である郡山廃寺が最も古く、次いで奈良時代の陸奥国分寺・国分尼寺である。

○仙台市内の主な遺物

- ・土師器・須恵器・陶器等の土器類、瓦が大半を占める。須恵器や瓦は主に官衙による技術導入により生産。土師器（関東系土器）は、関東などからの移民が伝えた技法で製作したと考えられる。この他に東海地方などで生産された須恵器・灰釉陶器、緑釉陶器が出土。

この他に、鉄製品、木製品等も出土。

[文字関係資料]

墨書土器・刻書土器、刻印などの文字瓦、木簡、漆紙文書がある。

■中世：武家政権誕生 変わる社会

- ・中世は12世紀中頃の武家政権の誕生から豊臣政権成立の16世紀末頃までの約400年余を指す。
- ・12世紀後半から防御的要素の加わった土塁、堀で囲まれた屋敷・館が出現。
- ・14～15世紀には、より防御的機能を高めた城郭が造られる。戦国大名が現れ城を中心とした城下町が形成され、商工業が発達し広域物流も発達。

○仙台市内の主な遺跡

[平安時代末から鎌倉時代初期]

- ・12世紀後半には、大小の掘立柱建物と井戸などから構成の「屋敷」成立。13世紀初め頃までには、名取川流域では山口・今泉・南小泉・王ノ壇遺跡など成立。いずれも河川沿いの自然堤防に立地。周辺の水田域、畑地を経済基盤とした上層農民や村落領主クラスの屋敷と考えられる。

[鎌倉時代後期]

- ・13世紀中頃から14世紀前半まで。屋敷を区画する溝が見られ、敷地は半町（55 m）四方を超える大規模な屋敷が出現。隣接する区画に墓域・供養の場もある。
- ・富沢遺跡ではこの時期、基幹水路を開削し、低湿地域にも水田を拡大している。
- ・広瀬川下流から名取川下流域にかけて、石巻地方産の大型粘板岩製板碑の分布があり、粘板岩製板碑の南限になっている。太平洋岸と名取川域の舟運の展開が想定されている。

[南北朝時代・室町時代・戦国時代]

- ・14世紀中頃から16世紀末まで。大規模な堀や土塁をめぐらす、巨大な城館が平野部に出現。名取川下流域の南小泉遺跡、今泉城跡、沖野城跡などである。丘陵部には、山城が出

現。岩切城跡、長命館跡など。

・戦国時代には現在の宮城野区、多賀城市、塩釜市、利府町あたりを留守氏が、青葉区・泉区・若林区は国分氏が大半を所有していたが、次第に伊達氏の勢力に吸収されていく。

○仙台市内出土の主な遺物

[陶磁器・土器]:壺・甕・播(すり)鉢が常滑・渥美産。碗・皿・瓶子などの食器や調度品は瀬戸産施釉陶器。中国産青磁・白磁・染付、地元産無釉陶器などがある。

[木製品・漆器]:椀・皿・膳・杓子など飲食器。すりこぎ・まないたなどの調理・炊事具。曲物・くり物・箆・箱など容器。櫛などの装身具、下駄・板草履など。自在鉤など火処具。鋤など農具。位牌などがある。今泉・下飯田・鴻ノ巣・山口・中田南遺跡などで出土。

[銭]:領主・上層農民クラスの屋敷やその周辺から中国銭(主に宋銭)が出土。15～16世紀には集落跡などからも多数出土。永楽通宝や洪武通宝などの明銭、北宋銭も多い。

○富沢遺跡

・長町南地区で中世の屋敷跡と水田跡が集中的に発見。居住域は東の自然堤防上にあり、水田域は西隣の自然堤防の縁辺から後背湿地にかけて広がる。水田は短辺5～7m、長辺14m前後の長方形である。

・屋敷跡と水田跡は、出土遺物から13～17世紀初頭のものと考えられ、屋敷跡は建物や溝の規模が小さく建物はわずかで、有力農民層の屋敷跡と考えられる。竪穴遺構出土の「三斗三升」書かれた木簡(付け札)と烏帽子状の漆製品が出土している。

■近世:幕藩体制～明治維新

・1600年前後の幕藩体制始動から1868年の明治維新後の明治政府による種々の行政的
改革まで。

・文字史料や民族史料が豊富な近世の歴史研究にも、考古学資料に基礎を置いた文化の解明が進められてきている。

○仙台市内の主な遺跡

・都市・村落・耕地の遺跡は、中世から近世あるいは古代から近世の遺構が重層的に発見されることが多い。

若林区南小泉遺跡・養種園遺跡の江戸時代初期の遺構は、一時期ではあるが城下町「仙台」と「若林」の並存が想定されている。

・農村部の遺跡には、太白区の松木遺跡があり、有力農民の屋敷跡の一部と考えられる。

・耕地も古い水田跡の上層に近世水田跡が発見される場合が多い。富沢遺跡では、弥生時代以来近世までの水田跡の発見地点がある。

・考古学的調査と文献・絵画史料との関係で注目される遺跡として、仙台城二の丸遺跡では、調査された遺構と城絵図の対応が明らかにされた。米蔵等が置かれた三の丸では、これと関連する遺構・遺物が発見されている。

・墓地遺跡では、伊達家墓所や新妻家墓地の武士階級、富沢遺跡などでは庶民墓地が調査されている。

○仙台市内出土の遺物

[陶器]:近世初期は、「桃山茶陶」と呼ばれる茶の湯や供宴の食器が、仙台城跡や南小泉遺跡・養種園遺跡などでも出土。美濃焼、唐津焼、備前焼などである。18世紀中頃には、大堀相馬焼の碗・皿が市内各遺跡で出土。地元産の堤焼も出土。

[磁器]:近世初期には、中国の染付(青花)が主で、青磁・白磁等の出土数は少ない。武家地と見られる遺跡から出土。国産の肥前磁器は、仙台城三の丸跡・南小泉遺跡の17世紀初めの製品が最古の例で、以後増加の傾向を示し、磁器の主流となる。19世紀には、瀬戸・切込・平清水の小型碗も出土。飲茶の習慣の普及を示すようである。

○富沢遺跡

[近世墓と近世の屋敷跡]:長町五丁目地区の近世墓は、11基の墓壇がほぼ直線的に配置。方形の箱型の木棺(一辺35～50cmほど)が多い。松や杉材を使用。全て土葬

墓であり、副葬品には、ガラス鏡・火消し壺・大堀相馬焼の碗・鉄砲玉・数珠球・筭・煙管・提灯の底板・寛永通宝などがある。幕末以降から明治時代の遺物と考えられている。

泉崎地域では、28基密集して土葬墓が発見。ほとんどが、木棺と桶が出土。副葬品には、箸一膳を乗せた大堀相馬焼の茶碗、肥前焼の皿、提灯、煙管・柄鏡・櫛・寛永通宝など。江戸時代全般にわたる墓壙群と考えられる。[水田跡]:発掘された水田区画は15枚確認。一枚の面積は80～250㎡で、形状大きさとも一定していない。水田域には基幹水路とそこから取水する補助水路が配置。杭列による護岸がなされている。

○鹿除(ししよけ)土手

・シシ(猪、鹿)の食害から田畑を守るため江戸時代に築かれた土手。仙台城を囲むように、青葉山丘陵の西端の山田地区から東端の根岸交差点付近を経て北上し、愛宕山近くの大窪谷地付近まで続いていた。東西の総延長は約6.4kmに及ぶ。現存部分は山田、鉤取、西多賀、根岸に見られる。

・山田地区に現存する土手は、高さ約2m、幅約6m。江戸時代中期以前に構築された。歴代伊達藩主は、この地域近くの鉤取山で、田畑の害獣駆除と軍事訓練を兼ね毎年冬に巻き狩りを行い、1回平均鹿・猪50頭。多い時で123頭(1748年)を捕獲したという。・縄文時代までは森・台地・低地に自由に棲息し、人々の主要な獲物だった鹿・猪も、弥生時代以降は水田・畑地の拡大や集落の増加などで棲息地を狭められ、江戸時代に至り害

獣扱いになり鹿除土手で隔離されたようである。現在では、鹿除け土手の内側にも住宅地が立ち並んでいる。

4. おわりに

・活動報告書のほとんどが、これまで埋蔵文化財の調査・研究に携わった多くの方々の熱意と努力が結集された文献等を網羅的に紹介するにとどまり、実際に発掘等された遺跡・遺構・遺物と向き合い暮らしの実態に踏み込むような活動が不足し、自らの的確な考察を展開する域までには至らなかった。

・しかし、旧石器時代から近世までの各時代の特徴・変遷など全体の流れをつかむことができ、先人たちが築き、育んできた社会・文化の多様性と学び甲斐の深さを実感したところである。

・また、歴史は日々、考古学上の地道な発掘等の活動による新たな発見・研究が続けられ、史実の実証や手直しを受けていることも改めて認識した。

・今後は、今回の活動をステップにし、生涯学習の一環として、特定の時代・遺跡・遺物に特化させ関係文献の閲覧や遺跡等の見学、関連ボランティア活動等を通じて考古学の見識を深め続けて行くことを心に誓ったところである。

・この約1年間、さまざまなご指導を頂いた地底の森ミュージアムの皆様に深く感謝しますとともに、これからも折に触れご指導を頂きますようお願いいたします。

※参考文献

仙台市 1997『仙台市史通史1 原始』仙台市

仙台市 1991『富沢遺跡仙台市文化財調査第149集』・同 1992 第160集 仙台市

須藤隆・今泉隆雄 1992『新版古代の日本9 東北・北海道』角川書店

藤本強 2008『市民の考古学④考古学でつづる日本史』同成社

白石浩之 2011『日本史リブレット1 旧石器時代の社会と文化』山川出版社

今村啓爾 2010『日本史リブレット2 縄文の豊かさと限界』山川出版社

武末純一 2010『弥生の村』山川出版社。

瀧音能之 2014『日本の古代史』別冊宝島2108号

郡山廃寺の瓦

佐藤陣一

1. はじめに

平成 24 年 6 月、第 2 の人生「小人閑居して不善をなす」ことのないようにと、この年の 4 月から加入した仙台・文化財サポーター会保存継承部会のメンバーと共に仙台市の被災文化財レスキュー活動に参加した。初めは石巻文化センターが収蔵していた津波被害で汚れた経石や沼津貝塚の遺物の洗浄作業を行い、後半は地震で被災した与兵衛沼窯跡から出土した瓦片、仙台郡山遺跡の瓦片の洗浄を行った。単純な作業であったが不思議と充実した一時でした。その後瓦片の接合作業も体験、何百個もの破片の中から接合できるものを見つけ出すことは気の遠くなる作業で一日一個か二個接合できれば上出来であったが 1300 年以上も昔の古代の遺物に直接手を触れることに心ときめくものを覚えた。

そして平成 25 年 3 月 16 日から行われた被災ミュージアム再興事業に伴う地底の森ミュージアムでの展示会でほぼ完全な形に接合された仙台郡山遺跡の 5 kg はあろうかと思われるずっしりと重い瓦を手にした時、何とも言えぬ大きな驚きを感じた。それが「仙台郡山遺跡の瓦」との出会いであった。

II. 方法

今回、市民文化財研究員の講座を受けるに当たってレポート提出と言われ、この瓦をテーマとして取り組みたいと思った。古代の東北、仙台郡山の地で何時頃、どのような人々がどのようにして作ったものか、まずは日本の瓦の歴史を調べるために、「百聞は一見にしかず」で日本で最初の瓦葺き仏教寺院と言われている飛鳥寺、そして当時の瓦が現存する元

興寺等々、また現在寺院の瓦を製造している現場を見学すべく奈良明日香地方に行ってみることにした。

III. 成果

1. 日本への瓦の伝来

仏教建築の伝来により日本の瓦の歴史は始まる。日本への仏教の公伝は『日本書紀』によれば欽明 13 年（552 年）、元興寺縁起では宣化 3 年（538 年）百済の聖明王が欽明天皇に金銅の釈迦如来像や経典、仏具などを献上したことが始まりで、寺院建設は『日本書紀』によれば崇峻元年（588 年）百済国から派遣された寺工 2 名鑑盤博士 1 名画工 1 名と共に瓦博士 4 名が渡来し、日本初の瓦葺寺院飛鳥寺が時の権勢者蘇我馬子が蘇我本宗家の氏寺として造営が開始され、推古 4 年（596 年）堂塔が完成した。

この飛鳥寺で使用された瓦は、飛鳥寺寺域南東隅から 75 m にある飛鳥寺瓦窯で丘陵斜面に作られ、裾に焚口を置き、岩盤中に燃焼室と階段状の焼成室、煙道を設けた登窯で製作された（『飛鳥寺瓦窯跡案内表示』より）。

ここでの軒丸瓦は素弁蓮華文と呼ばれるシ



写真 1 飛鳥寺瓦窯跡案内表示

ンプルな形で百済の瓦に似ており花びらの弁の先端が割れている「花組」と花びらの先端に星のような点がある「星組」（納屋守幸氏が言う）と呼ばれる二種類の瓦が両用され、これは他の瓦窯で焼かれたようで無段の行基式瓦である。

なお、この当時葺かれた瓦は平城宮遷都に伴い飛鳥から奈良に移設された元興寺の極楽坊本堂、禅室に現在も 170 枚使用されている。

2. 飛鳥の瓦の流布

大和政権の仏法興隆政策による仏教の広まりと相まって仏教寺院は畿内の大王、豪族を中心に崇敬され、難波の四天王寺、斑鳩の法隆寺等瓦葺寺院が建立され、文武天皇の時代には大宮大寺、川原寺、薬師寺等は官寺として朝廷の庇護を受けるようになる。

この頃、屋根瓦は同范、同文瓦が拡散しやがて畿内各地で独自の文様が形成されたと古川真司氏が「飛鳥の都」で指摘しているが、その中で軒先を飾った軒丸瓦の文様は蓮華文が使われ、大きな流れは蓮華の花びらが単弁で表現された山田寺の山田寺式と複弁で表現される川原寺式の二つである（この山田寺の瓦が郡山廃寺出土の軒丸瓦及び重弧文軒平瓦の組み合わせを含め非常に似ている。これに

ついては後述する）。

一つのパターンとして「この畿内に源流をもつ文様が独自の地方色を生み隣接する郡（評）を含む広がりをもって分布する場合、その分布は律令制の地方行政単位である国を越えて広がることも少なくない」（上原 1997）。また時を経て、天武 5 年（676 年）に着工され、持統 8 年（694 年）に飛鳥浄御原宮から遷都された藤原宮では宮殿建築に二百万枚の瓦が使用されたと言われ、奈良地方だけではなく、讃岐、淡路、和泉、近江などの遠隔地で生産された瓦が運びこまれたように、七世紀末には官窯体制が整備されたものと考えられ、さらに中央施設、地方官衙、大寺院等には造営担当の下に造瓦所、造瓦司がおかれ古代の瓦作りを主導したものと思われる。

3. 郡山遺跡・郡山廃寺の瓦

大和朝廷による律令国家形成にとって地方支配体制の整備は喫緊の課題であり、東北方にあっては国家領域の拡大、辺境支配政策として城柵の設置、他地域からの移民の移住、蝦夷の服属策が行われた。大化の改新後、間もなく造営されたと考えられる郡山官衙はまさにこの政策をもとに行われた。

仙台平野の中央部を流れる広瀬川と名取川の合流地点から北西に 1.5km、J R 長町駅東側約 60ha に及ぶ広大な遺跡であり、大きく 3 つの遺構に分けられる。

① I 期官衙と呼ばれる城柵で材木列塀を外囲施設とし西南 295.4 m 東北 604 m のエリアの内に掘立柱建物と竪穴住居が混在、多賀城国府跡と同規模の政庁跡と思われる中枢区、倉庫群区、畿内産土師器が出土した雑舎群区、武器製造が考えられる鍛冶工房等の施設がみられるが礎石建物がみられず、瓦葺の建物はない。

② II 期官衙は七世紀中頃に建設された陸奥国



写真 2 山田寺（上）と郡山廃寺（下）の瓦

府と考えられ、Ⅰ期官衙を取り壊した後に建設された。建物の基準方向はほぼ真南北に建てられている。外圍施設は直径 30cm 程の栗の丸太材の材木列塀で一辺四町（534 m）の正形に区画された藤原宮をモデルに 1/4 の規模で造営されている。正殿中心よりやや南に儀式・政務・宴会が行われた政庁があり、8 間×5 間の四面廂付正殿があり、南辺中央には 5 間×2 間 12 脚門の外郭南門が、又西南隅と西辺に 2 間×2 間の櫓がみられる。正殿北には石敷の遺構があり、又飛鳥石神遺跡にみられる服属儀礼に使われた石組の池が発見されている。その他、前殿、西脇殿、南殿があり、東西に楼阁建物が配置され東辺には鉄鍛造・銅鑄造・漆工房が、西辺には鉄・漆工房があり、さらに政庁の外東西に 6 軒の曹司と思われる建物がある。

しかしながら、このⅡ期官衙跡からも現在は若干の瓦しか出土しておらず瓦葺の建物は確認されていない。

③ 郡山廃寺は、Ⅱ期官衙南西寄りにⅡ期官衙と同時期に造営され、主要構成は北辺 120 m 南辺 125 m 南北 169 m の材木列塀の外圍施設と南から八脚門の南大門跡、仏像を祀る金堂跡、僧尼が仏教を勉学する講堂跡、僧坊跡、そして金堂の東に大型の礎石が存在するとされることから仏舎利を祀る塔跡が想定される。

これらの遺構で明確に瓦葺建物が想定されるのは、まず講堂で版築基壇に堀込地業がみられ礎石式本格瓦葺建物と考えられる。その規模は基壇の大きさが東西 32 m×南北 12 m である。又、周辺から大量の各種瓦が出土している東西 17 m 南北 20 m の金堂も瓦葺建物と考えられ、さらに大型礎石の塔 12 m×12 m も瓦葺建物であったと想定される。

この廃寺から出土の瓦のうち、軒丸瓦は単弁蓮華文で直径 18 cm から 18.7 cm、中房径 4.2 ～ 4.6 cm、厚さ 3.8 cm ～ 4.9 cm で、円形の

内区は尖端が尖った八葉の蓮弁と間弁で中房に花卉形の蓮子 4 個を置く。ここが畿内及び東北南部以西で出土する単弁蓮華文軒丸瓦と大きく違う点ではあるが、山田寺式軒瓦であり、これについては「天武朝以降になって利用される事が多かったが勅願寺の軒瓦が全国に普及した」とする古川真司氏の指摘がある。また、辺境の地陸奥国で独自の「瓦」文化様式を開花させたのではないかと思う。

丸瓦は縦 28.7 cm から 36.6 cm、横 15.1 cm から 21.7 cm で厚さは 1.6 cm ～ 2.3 cm の凸面は縄叩きナデ又はケズリで凹面は布目痕がある粘土板桶巻作り無段（行基式）ある。

軒平瓦はロクロ挽重弧文の藤原宮以前の様式で、平瓦も粘土板桶巻作りで縦 28.7 cm ～ 45 cm、横 25.2 cm ～ 36.7 cm、厚さ 2 cm ～ 3.3 cm の凸縄叩きナデ型で、一部朱付着がある。凹面は布目痕がある。ただ軒平瓦の出土数が少ないが、これは現代でも一日一人 20 枚程度しか作成できない製作に手間のかかる軒平瓦の代用として初期の百済系寺院にみられるよう平瓦を軒先に用いていたためと考えられる。

また、単弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦の組合せは初期山田寺の組合せであることに注目しておきたい。

さて、この郡山廃寺で葺かれた瓦の量ほどの程度であったのか検証してみたい。一般的に伝統的堂塔建築で使用される瓦は坪当り、丸瓦が 40 ～ 50 枚、平瓦が 120 ～ 130 枚と言われており、この平均値を使って、前記の郡山廃寺の瓦葺建物と想定できる建物の総坪数で換算すると、丸瓦が約 18,000 枚、平瓦が 32,800 枚となる。重量的にも一枚当たり 5 kg とすると総重量は 223 t になる。

さらに、これらの瓦はどこで製造されたのか。伊東信雄先生が記述された『仙台市史 3 別編』には、郡山遺跡から約 3 km の距離にある木戸口瓦窯と、その南南西 300 m の西台瓦窯である。木戸口窯からは灰色赤褐色の布

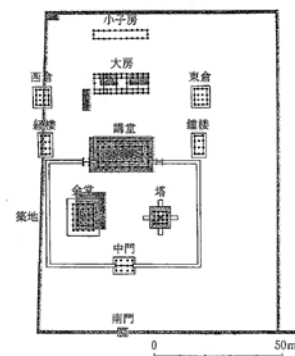
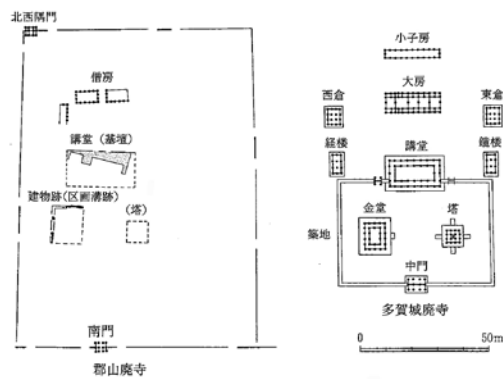


図1 郡山廃寺と多賀城廃寺（佐川 2003）

目瓦の破片が、そして西台窯からは単弁八葉重蓮華の鑑瓦（軒丸瓦）が出土した、とある。現在はその面影は全くみられないが、富沢丘陵地である。

この瓦の製造は工藤雅樹氏の説のように「陸奥国においては造瓦は国家事業であり官営瓦窯として行われた」（工藤 2011）と考えられる。

IV. まとめ

最後に、この郡山廃寺の瓦はその後、陸奥の国府多賀城、そして陸奥国分寺、尼寺、さらに多くの古代東北の瓦葺建物に継承される中、独自の進化をとげた。その歴史は 869 年大地震の復興の為に新羅系工人の支援のもと行われた大規模な瓦の生産が最後になったようである。今回郡山附属寺院の瓦にスポットを当ててみて瓦の歴史が語ることの多さに驚きを覚えると共に、これからも陸奥国の瓦に注目していきたい。

※参考文献

- 青木和夫・岡田茂弘編 2006 『多賀城と古代東北』 吉川弘文館
- 明日香村教育委員会文化財課 2007 『飛鳥の古代学図録⑤ 飛鳥の寺院』（財）明日香村観光開発公社
- 伊東信雄 1975 『仙台市史 3 別編 1』
- 今泉隆雄 2013 「東北古代史を学ぶ」『2013 年度東北歴史博物館館長講座レジメ』
- 上原真人 1997 『歴史発掘 11 瓦を読む』 講談社
- 元興寺・元興寺文化財研究所 2002 『元興寺発掘』
- 工藤雅樹 2011 『古代蝦夷』 吉川弘文館
- 佐川正敏 2003 「仙台市郡山廃寺所用軒丸瓦の調査報告」『東北文化研究所紀要』 35
- 仙台市教育委員会 2005 『郡山遺跡発掘調査報告 総括編（1）・（2）』
- 多賀城市教育委員会 『多賀城市史 1』
- 辻 秀人 2000 「古代陸奥国の瓦」『仙台市史 通史 2 古代中世』
- 長島榮一 2009 『日本の遺跡 35 郡山遺跡』 同成社
- 奈良文化財研究所 1991 『藤原宮と京』
- 奈良文化財研究所 2012 『飛鳥資料館案内』
- 原町市立博物館 2000 『企画展図録第 13 集 古代の瓦と今の瓦』
- 宮城県教育委員会 1970 『多賀城跡調査報告』
- 渡邊泰伸 1990 「瓦生産の諸段階」『伊東信雄先生追悼論文集 考古学古代史論攷』

東北の装飾古墳の考察

末永志津

I. はじめに

熊本在住時に装飾古墳の存在を知った。装飾古墳とは5～7世紀頃、墓室の内部を線刻や美しい色彩の壁画または浮彫の彫刻などで装飾したものである。古墳全体に占める割合は極めて少なく九州にその大部分が、残りは山陰そして関東・東北にのみ存在する。本家九州より約1世紀遅れで出現した東北の装飾古墳について今回自分なりに考察してみたい。

II. 活動内容

1 文献の読み込み 2 宮城県や仙台市、九州国立博物館のホームページの活用 3 市民文化財研究員として受けた考古学関連の講義 4 郡山遺跡の横穴墓関連の講座 5 熊本県装飾古墳館、東北歴史博物館の見学 以上のような活動をもとに調査を行った。

III. 成果

1 装飾古墳の変遷

まず装飾古墳の変遷について簡単に述べてみたい。()内は代表的文様をあらわす。

① 石棺系 4世紀中頃～5世紀中頃に石棺の蓋や周囲を線刻(直弧文、円文、同心円文、武器武具)

② 石障系 5世紀末頃、石障に彫刻。中頃には彫刻のうえ彩色(円文、直弧文、武器武具、同心円文、三角文)

③ 壁画系 6世紀前半から。装飾古墳の最盛期。壁画に直接彩色(同心円文、連続三角文、蕨手文、動物) 6世紀末～7世紀初頭には朱一色の彩色。終末期に至り線刻のみ。な

ぐり書きのようなもの。

2 東北の装飾古墳の特徴

① 概要

東北の装飾古墳は泉崎を除きほとんどが太平洋沿岸に位置している。隣の茨城県でもこの傾向がみられる。推定年代は、中田6世紀末、泉崎7世紀前半、清戸迫7世紀前半、羽山7世紀前半、愛宕山7世紀前半～8世紀前半、大年寺7世紀後半～8世紀前半、山畑7世紀後半～8世紀前半の装飾古墳の終末期にあたる。石棺、石障、石屋形の段階のものではなく横穴墓の石室に描かれた壁画系が主流である。使用された顔料は赤(ベンガラ)1色



図1 装飾古墳分布図(玉利 1978)

又は中田と羽山の赤と白（白土）の2色である。

② 特徴的な文様と表現形式

1) 三角文（連続三角文）

九州では6世紀の古墳に良くみられる文様であるが、東北では少数派で、中田の連続三角文と泉崎に単独で1個描かれている。中田の連続三角文については、いわき地方の埴輪に三角文がしばしば描かれていたことから、九州とは別に発展したこの地域独自の図文とする見方もある。埴輪の代表的な例として近くの神谷作古墳（いわき市神谷作）出土の天冠男子像が挙げられる。冠帽や籠手や胴に赤く彩色された連続三角文が描かれていた。地理的に隣接した茨城県の虎塚古墳（7世紀前半、赤と白）かんぶり穴横穴（7世紀、赤白黒）にも同様の連続三角文が描かれている。色使いや表現方法の類似性から茨城県の古墳との強い関連性も考えられる。九州の三角文との関係はまだわからないが、中田が三角文主流

の壁画の北限であることが推定される。

2) 同心円文

この文様は装飾古墳の最初期から多数使われていたが、東北では山畑、関東にも虎塚のみと九州以外では数が少ない。同心円文は弥生時代の副葬品である鏡の代りに描かれるようになった。鏡自体の副葬がなくなる6世紀末～7世紀の初めには九州でも描かれなくなる。しかし珍敷塚古墳（6世紀後半、福岡県吉井町）のように同心円を太陽として描いている所もあり、ひとつの文様が時代や地域により様々な解釈がなされているとみるべきであろう。山畑は同心円文と珠文（粒状の小さな円文）主体の壁画で中田が三角文系なら円文系の壁画である。星を表すと云われる珠文と共に描かれていることから、同心円文は鏡、太陽どちらの意味にもとれる。最北の装飾古墳と呼ばれる山畑に、最も古い文様のひとつである同心円文の最後の足跡が残っているこ



図2 中田横穴の壁画（国立歴史 1995）



図3 山畑横穴の壁画（国立歴史 1995）

とは非常に興味深い。

3) 渦巻き文

渦巻き文は東北福島県にのみ見られる文様で羽山、清戸迫、泉崎、館山穴6号横穴(いわき市、線刻)の半径40km圏内の4基に存在している。馬や狩猟図と共に描かれることから、獲物を捕らえる罟を表すと云う説もある。時の流れや太陽、内臓、又はただの装飾と云う説もある。元々東北の縄文土器や土偶には同心円文はなく、多種多様な渦巻き文が使われていた。このため一度は影を潜めた渦巻き文が、様々な文化的刺激や交流を経て装飾古墳終末期の古墳時代に再現されたと云う説もある。縄文と古墳時代の時間差を指摘する意見もあるが、千年以上続いた縄文時代の長さとその後に続く影響を考えると、必ずしも無縁であるとは言い切れない。又、羽山のように渦巻き文に区切り線を入れているものもある。これなどはむしろ石棺系の時代に使われていた直弧文の変形とも見て取れる。愛宕山の円文に十字を組合わせた文様も同じ系統だろうか。直弧文は4世紀末の東北に既に入っており例として会津大塚山古墳出土の靱の装飾が挙げられる。渦巻き文の出現にな



図4 羽山横穴の壁画(玉利 1978)

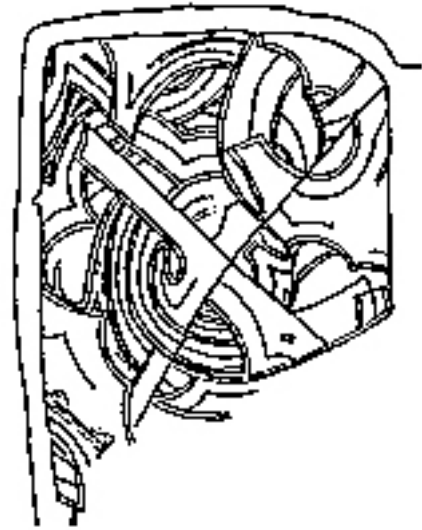


図5 会津大塚山古墳の靱

んらかの影響があった可能性も考えられる。

4) 家屋表現

羽山、泉崎、山畑、大年寺の石室は、天井と側壁の区別がある家屋表現がなされている。石室内を家屋の家内にみたと柱や棟、梁などを描くもので、他には九州の旭台地下式横穴群(5世紀中頃から後半、宮崎県)にのみ見られる珍しい表現である。高句麗や新羅、古代中国の古墳壁画に多くの家屋表現が存在することから大陸文化の強い影響が推定される。

5) 狩猟図、女性像など

清戸迫、泉崎には狩猟図が描かれている。これも日本の古墳壁画には珍しい表現で、他には九州の五郎山古墳(6世紀後半、福岡県筑紫野町)にのみ描かれている。五郎山古墳と泉崎には他にも、やはり珍しい女性像が描かれていると云う共通点がある。どちらも何かを捧げ持つ女性像で(泉崎は3人、)類似した埴輪に丸森町台町古墳群出土「壺を持つ女子」が挙げられる。羽山の2色使いの鹿が



図6 泉崎横穴の壁画模写（国立歴 1995）

印象的な物語性の高い壁画については、日下八光氏が敦煌の壁画「九色鹿本生譚」がその由来であると指摘している。狩猟図、女性像、羽山の壁画も、家屋表現同様に大陸文化の影響は明らかである。ただ、その経路は九州経由であったのか、全く別の道筋だったのか。地理的にも近い本家九州の装飾古墳壁画でした。

参考文献

- 小林行雄 1964 『装飾古墳』 平凡社
 玉利 勲 1978 『装飾古墳』 平凡社
 玉利 勲 1984 『装飾古墳紀行』 新潮社
 齋藤 忠 1983 『装飾古墳・図文から見た日本と大陸文化』 日本書籍
 日下八光 1998 『東国の装飾古墳』 雄山閣
 国立歴史民俗博物館編 1995 『装飾古墳が語るもの 古代日本人の心象風景』 吉川弘文館
 柳沢一男 2004 『シリーズ「遺跡を学ぶ」010 描かれた黄泉の世界 王塚古墳』 新泉社
 仙台歴史ミュージアムネットワークシート No.5-1 『仙台の遺跡2 名取川と広瀬川ぞいの横穴墓—黄泉の国からのメッセージ』

その他

- 九州国立博物館 『装飾古墳データベース』
 宮城県公式ウェブサイト 『山畑横穴古墳群』 仙台市公式ウェブサイト 『愛宕山横穴墓群』

に殆ど影響を与えることなく姿消した表現が、なぜ永い時を経て装飾古墳の終末期に東北で再び姿を現したのか未だ大きな謎である。

IV. おわりに

今回のレポートは考古学に関して全くの素人である自分が、装飾古墳について一から学ぶと云う意味合いが大きかった。数は少ないが、それぞれに特色ある東北の装飾古墳への理解が少しは深められたと思う。今後も装飾古墳のみならず歴史全般に興味を持ち続けてゆきたい。

最後になりますが、一年間御指導くださいました「地底の森ミュージアム」の皆様、共に学んだ市民文化財研究員の皆様へ心から感謝の意を述べたいと思います。有難うござい

貝殻から覗いた縄文人の暮らし

菅原義雄

1. はじめに

「宮城県の貝塚」によれば、宮城県内で発見された石器時代の遺跡は23か所、そのうち貝塚は11か所との報告が（日本石器時代人民遺物発見地名表 第二版）あるが、それ以降100年を経た1989年の調査では、貝塚の数は320か所になりました。この中には、古代以降の貝塚も多数含まれています。それにしても300を超える数は、国内でも宮城県が有数の貝塚のある県であることを示しています。ただ、部分的に破壊されているところが多く、特に、淡水産の貝塚群などは開田工事で地形まで変化している場所がありますが、貝塚は、原始・古代の人々の生活を具体的に示してくれる極めて重要な情報量の多い遺跡ですので大切に保存して置きたいものです。

2. 海の食文化を考える

我が国は周りを海で囲まれた島国であり、貝塚に残る貝殻などの豊富な水産資源は、縄文人の海と人類の強い結びつきを示す文化遺産に他ならない。海そのものを、自分たちの生活を支える生産の場として現在のように活用できるようになったのは、ほぼ1万年以前からに過ぎない。遡って考えれば、貝類は熱帯から亜寒帯にかけて広く分布し、生産性が高く増養殖の適種であったかも知れないが、何よりも種の持つ独特な魅力的な風味が、古来、人類から愛されていたに違いない。

ここでは、貝塚から見た縄文人の食生活について、日本全国にある貝塚から発掘された貝の種類から考察を加えてみたいと思います。

網走市にあるモヨロ貝塚

際立った自然の猛威の少ない安定した気候で、北国としては、比較的居住に適した網走市にある。環境条件としては、流水によってもたらされた栄養塩を多く含む海水は、プランクトンを豊富に含み、良好な漁場を形成している。

貝塚から発掘された貝類は、ホタテガイ、アサリ、オオノガイ、ウバガイ等が主体であった。ただし、これらの中に、現在は温暖水系に生息しているウネナシトマヤガイが含まれており、当時の気温が現在より高い状態にあったと考えられている。

松島湾宮戸島にある里浜貝塚

宮城県内にある貝塚は、地域的にみて、5ブロックに分けられている。この中で、松島湾沿岸地域が120ヶ所と県全体の貝塚数の約40%を占めている。しかも、沿岸部の狭い範囲に密集している。これらの中で、全国でも有数の大形貝塚としての松島湾三大貝塚の一つで東松島市の宮戸島にある。

ここは、親潮と黒潮のぶつかり合う三陸漁場の一部であり漁業資源の豊富な海洋環境である。

この貝塚での悉皆調査の結果、縄文前期には、岩礁性のスガイ、レイシ、イボニシ、カリガネエガイ、イガイ、が多く、中期には、アサリが目立ち、後期には、アサリが主体でアカニシやカキを含み、晩期になるとアサリとスガイが圧倒的に多く、一般的な、食用貝である、イガイ、オオノガイ、マガキ、オキシジミなどは、2.3%に過ぎない。

このようなデータを指標にして四季を読み

解いてみようとした試みがなされ、里浜縄文人の豊かな食料資源環境を明らかにした。即ち、春―夏にかけては、アサリ、夏の指標としては、アワビ、アカニシ、ヒメエゾボラ、秋からは海の仕事が低調になるが、ここでカキが登場する。縄文前期から晩期にかけて(縄文海進前後)、スガイ、クボガイ、カリガネエガイなど岩礫性の貝類からアサリ、オオノガイなどの砂泥性の貝類に変化している。

霞ヶ浦美浦村にある陸平貝塚

現在までに、縄文早期、前期、中期、後期それぞれの貝層のサンプルが得られており、貝の種類も明らかになっている。時期ごとの大きな違いとして、早期では内湾の泥質干潟に生息するマガキとハイガイが主体を占めるのに対し、以後の時期ではハマグリを主体にして、内湾の砂泥質の干潟に棲むシオフキ、サルボウ、小型巻貝のウミナナやホソウミナナなどが多い。

この現象は、縄文海進により早期の貝塚に広域的にみられ、急激な海面上昇によって、内陸の谷へ海水が浸入し、マガキやハイガイの生息に適した泥質干潟が広く形成され、その後、周辺からの砂礫の堆積が進み、ハマグリなどの生息に適した砂泥質干潟が、形成されたと説明されている。また、前期以降のサンプルの中には、塩分濃度が低い水域に生息する貝や淡水産の貝が殆んど混在しないことから考えて、この砂泥質干潟は後期初頭まで維持され、ハマグリなどの採集を支えていたものと思う。

東京湾市川市にある姥山貝塚

一般的に、多くの人々は貝塚のすぐ下は海だと思っているようです。どうも貝塚＝漁村＝目の前は海、という連想に由来するらしい。海岸線は時代によってかなり変動するので、貝塚と海の間隔を想定するのはなかなか難しいことのように思われます。貝塚と海岸線の間隔を推

定した研究結果があり、貝塚の多くは、当時海から数キロ離れている、と言うのが実際の姿のようです。

発掘された貝類は、25種が記載されているが、このうちカワアイとカタツムリを除く23種は海産の貝であり、ハマグリ、カキ、シオフキ、アカニシとオキシジミが多かった。しかし、場所により、アサリやイボキサゴが多かったり、貝層別に下層はハマグリ、サルボウ、カガミガイ、ハイガイとマガキが多いのに、上層はマガキがほとんどであったなど、様々な分布状態を示した。堆積の状態を見ると、ハマグリーマガキ―ハイガイ―ハマグリのサイクルが見られる。

千葉県市原市にある西広貝塚

貝塚の貝層を示す言葉に、純貝層・混土貝層・混貝土層などがあるが、西広貝塚は縄文時代後期から晩期にかけての貝塚で、貝の堆積が厚いところで2メートルにも及ぶ関東地方屈指の大貝塚である。

堆積の状態はおおむね良好で、ハマグリ、アサリやシオフキなどの二枚貝とイボキサゴと呼ばれる小型の巻貝を主体とした貝層が交互に重なっていた。これらの他に、汽水域に棲むヤマトシジミや淡水域のマツカサガイやカワナナなどが含まれている。さらに、様々な道具類として、チョウセンハマグリ、アリソガイやオオトリガイなど、装身具の貝材として、ベンケイガイ、タカラガイやイモガイなどが、これに合わせて小型巻貝であるアマオブネガイ、フトコロガイやマツムシガイなどが、出土している。オオツタノハ製の貝輪なども見られた。

都内大森にある大森貝塚

大森貝塚で出土した貝は、二枚貝が15種と巻貝17種が報告されている。これらの中で、数が多く集まり、現生種と比較できたのは、二枚貝では、サルボウ、アカガイ、ハイ

ガイ、オキシジミ、アサリ、カガミガイ、シ
オフキ、ハマグリとオオノガイなどであり、
巻貝では、バイ、レイシ、ツメタガイとスガ
イなどである。その他の二枚貝としては、マ
テガイ、ミルクイ、イタボガキとマガキなど
であり、巻貝では、ナガニシ、アカニシ、テ
ングニシ、ムシロガイ、ウミニナ、ニナとイ
ボキサゴなどの出土が読み取れる。これらの
貝類組成については、湾奥部砂泥質潮間帯お
よび湾中央部砂質潮間帯に相当している。

ハイガイやスガイが豊富に出土するのに、
現在の近隣地域では全く見られないか、より
南に行かないと見られない事実が指摘されて
いる。

有明海沿岸にある曾畑貝塚

有明海東岸の貝塚群は、仙台湾、東京湾、
伊勢湾及び瀬戸内海に並ぶ有数の規模を誇っ
ている。

貝塚低湿地の曾畑式土器の層からマガキの
貝殻が見つかった。このほか、ハイガイとマ
ガキを中心に、アサリ、オキシジミ、ハマグリ、
シオフキ、サルボウ、ヤマトシジミ、アカニ
シ、フトヘナタリ、スガイ、ウミニナ、マテ
ガイ、カガミガイとツメタガイの貝殻が見つ
かった。これらは、汽水域に生息するものも
含まれるが、ほとんどが内湾の干潟などに生
息する貝である。

このほか、熊本平野の南東部には著名な貝
塚が多いが、その主なものは、

轟 貝塚 縄文前期 6000年前

ハイガイ、サルボウ、ハマグリ主体
阿高貝塚 縄文中期 5000年前

ハマグリ、マガキ主体
黒橋貝塚 中期～後期 5000-4000年前

ハマグリ、マガキ主体
御領貝塚 縄文後期 3000年前

シジミ（98％）淡水産
などが挙げられる。

考古学的遺物としての貝塚

上記の諸貝塚の記載の大きな共通点は、貝
塚には、当時の食糧に供して捨てられた、魚
貝、鳥獣などの骨、骨角器、果物・木の実、
灰、岩石、不必要な石器や土器などが捨てら
れ、それらが堆積して塚と言う遺跡になった
もので、縄文時代の食生活を研究する上で重
要な証拠を多く含んでいる。また、立地条件
として貝塚は貝の捕食に便利な水辺に居住地
がある場合に作られ、琵琶湖岸のように、淡
水産の貝でできた貝塚もあるが、大部分は海
岸付近に残されている。現在の貝塚の位置が
海岸から遠ざかっていても、残された貝が鹹
水産のものであれば、海岸線が移動したもの
と考えられている。貝塚は主として北太平洋
沿岸で発見されており、我が国では、日本海
沿岸より太平洋沿岸部に多い。

全国の貝塚の大部分が縄文時代のものでは
あることは、当時の人々の生活が、木の実の採
集や狩猟をするための山野や魚貝を漁労する
沿岸部とは離れ難かったとも推測でき
る。なお、貝塚からは、まれに人骨が発見さ
れたり、人工遺物が原形のまま出土すること
があり、単なる食物のゴミ捨て場ではなく、
すべてのものの霊を祭る場であったとの見方
もできる。

一方、それぞれの貝塚についての特異な問
題点を探ることができた。

モヨロ貝塚では、現生種では温暖な水系に
棲むウネナシトマヤガイが、含まれており、
現在よりも当時の海水温度が平均して高い温
度にあったことが挙げられる。

同様に、里浜貝塚でも、より南方系のスガ
イが、大量に貝層中に含まれている。縄文海
進による、現在よりも、海水面が2メートル
高いことによる影響の吟味が必要と思われ
る。

陸平貝塚では、縄文時代の時期別に貝類の
種類が異なることから、当時の海辺の環境を
推定できるのではなかろうか。さらに、大量

の小型巻貝については、嗜好性について触れられている。

姥山貝塚の場合は、海と貝塚の位置関係について、貝や魚が豊富な海のそばに住居を定めないのかの疑問に答えている。それは、生命のエネルギーを蓄える主食は、貝や魚ではなく、森や林で採れる木の実や根菜類であったからである。

近くに広大な干潟が広がる情景が浮かぶ、西広貝塚では、小型巻貝であるイボキサゴが大量に出土したことから、出しに使われたようだ。また、殻長3センチメートル以下のハマグリは殆んどないことから、資源が枯渇するような採り方を避けていたようだ。こんなことから、縄文人の自然との係り合いの基本が窺われる。

それと、ベンケイガイ、タカラガイ、イモガイ及びツノガイなどを加工した南房総産の貝製装身具にまつわる人の交流に興味を惹かれる。オオツタノハ貝輪が15点も出土している。

考古学の原点と謂われる大森貝塚では、大森の海岸では一般的にみられるが、貝塚では発見できない貝種があり、動物相の変化が考えられる。また、豊富に出土するのに、現在、近隣地域では、全く見られないか、より南へ行かないと見られない種があることからその分布が後退した。など、進化論的問題もある。

曾畑貝塚では、水辺の古環境を復元して縄文時代の生活環境を知るために、地層中に存在する珪藻の化石の調査・研究を行っている。その結果、当時は、海水の影響が強かったとか、気水性だったとか、あるいは湖沼だったと推定して、縄文人の生活状況を類推している。

4. 貝と人間とのかかわり

日本の貝塚から発見された貝類は、約300種以上あると言われている。これは縄文時代の人びとが、如何に貝という食糧資源

を盛んに利用していたかを示すものである。おそらく、貝類資源の開発は縄文時代に知り尽くされたと言ってもよい。ところで一つの貝塚を調査すると30～40種くらいの貝類が採集されていることが分かる。

そこで先ず、同名の現生種の生態・当時の採集状況を知る目的で以下のように、

ア. 川から流れ込む淡水の影響を受け、変わり易い環境で、泥底がおおいが、防波堤のような硬い場所のある内湾

イ. 外洋の砂底では、潮に流されないためや外敵から身を守るために、砂の中に潜って生活するものがいる砂浜

ウ. 波の荒い岩礁では、岩にくっ付いて生活する貝がたくさんいる岩礁などに分けて図版を作製した。

ヨーロッパでは貝塚を残すほど大量に貝を食する生活は、旧石器時代晩期から始まり、日本では縄文時代早期からみられ、弥生時代の中期まで盛んにつくられた。その一例として、横須賀市夏島にある縄文時代早期の貝塚で、貝層中のカキ殻の放射性炭素年代測定により、9240 ± 500B.P. という年代が得られている。貝塚の広さは早期・前期は狭い場所であったが、後期になると1万平方メートルに及ぶものもあり、貝層の厚さも20センチメートルから3メートル以上になるものもある。

さて、貝類の採集手段としては、私たちが行っている潮干狩りを想像すれば分かるように、素手か、用具としても粗末な木のへら状のものや尖った石などを使用して採集できる状態にあるものを捕獲したと思われる。したがって、図示したように、淡水の影響を受けやすい、湾奥の砂泥中の浅層に生息する種類や岩礁と言っても内湾に面した比較的波静かな岩の表面に、海藻とともに着生している種類が対象となっている。特に、巻貝類などの採集には、狩猟に使っていた道具類から考えて、漁獲用補助器具もかなり工夫されていた

と思う。

当時はまだ栽培の風習がなく、食材を自然にのみ頼っていたと考えると、年中、安定した食材はなく、当然のことながら主食・副食の区別はなかったと思う。季節毎に、鳥獣肉や貝類の他に、淡白な味の魚類や植物食品が想像以上に食膳をにぎわす雑食がとられていたのだろう。

調理法は、火で焼く、焙る、あるいは煮るといった方法か、そのまま生で食べていたのだろう。多くの貝塚では、小型の巻貝が発掘されているが、巻貝には辛味成分を持つ種が多く、恐らく、香辛料として使用され、魚介類や海藻類は、製塩が始まる前までは、そのまま塩分、ミネラル類の補給と調味料として役立てていたと思われる。このように、古代人の食性体系は、地域・気候および風土に密

接に関係していることは容易に分かる。

最近、炭素・窒素安定同位体を用いて、当時の人々がどのような栄養条件下にあったか、生業としてどれだけ漁業や農耕に関係していたかなど古代人の生活を知るための具体的な科学情報を与えてくれる食性解析法が紹介されている。それによると、C3植物と海産資源を混合利用している食生態は縄文時代の沿岸住民に見られるのみならず現代の日本人にすら共通しているという。

また、前述のように、珪藻分析に基づく古環境復元など、食環境と共に生物生存に必要な水環境の変遷についても興味深い研究が行われている。

いづれにせよ、貝塚については、様々な角度からの調査・解析が必要であり、それらを基に総合化されるものと思う。

参考文献

会田容弘 2007『松島湾の縄文カレンダー 里浜貝塚』 新泉社

奥谷喬司 1990『海の貝』 学習研究社

忍澤成視 2011『房総の縄文大貝塚 西広貝塚』 新泉社

加藤 緑 2006『日本考古学の原点 大森貝塚』 新泉社

木崎康弘 2004『豊饒の海の縄文文化 曾畑貝塚』 新泉社

菅原義雄 1991『海洋生物の付着機構』 恒星社厚生閣

菅原義雄 1994『カキ・ホタテガイ・アワビ』 恒星社厚生閣

鈴木公雄 1989『貝塚の考古学』 UP 考古学選書 5 東京大学出版会

東北歴史資料館 1989『宮城県の貝塚』 東北歴史資料館 2 5

中井信之 1998「高感度放射性炭素年代測定法の開発と応用」『新しい研究法は考古学になにをもたらしたのか』

クバプロ

中村哲也 2008『霞ヶ浦の縄文景観 陸平遺跡』 新泉社

堀越正行 2005『縄文の社会構造をのぞく 姥山貝塚』

波部忠重・小菅貞夫 1978『貝』 標準原色図鑑全集 3 保育社

南川雅男 1998「炭素・窒素同位体に基づく古代人の食生態の復元」『新しい研究法は考古学になにをもたらしたのか』 クバプロ

森 勇一 1998「珪藻分類に基づく古環境復元」『新しい研究法は考古学になにをもたらしたのか』 クバプロ

米村 衛 2012『北辺の海の民 モヨロ貝塚』 新泉社

ない かん 内 湾

川口・ひがた

引き潮のときにひあがるような砂底、砂でい底やどろ底にすむ貝です。ここは川の水や潮の満ち引きのえいきょうも大きく、複雑なかんきょうといえます。砂やどろは動きやすく、しっかりした足場がありません。それでも酸素が十分にあり、川が運んでくる有機物で栄養にとみ、生物が豊富な所です。潮ひがりのときに見られる貝もたくさんあります。

▼イボキサゴ 殻高1.6cm 殻径2.2cm



▲ウミニナ
殻高3cm 殻径1.3cm



▲ヘナタリガイ
殻高2.5cm 殻径1.2cm



▲フトヘナタリガイ
殻高4cm 殻径2cm



▲アカニシ
殻高15cm
殻径12cm

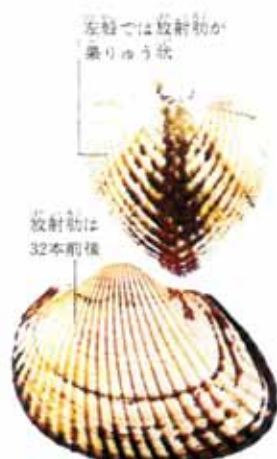
▶アカニシの
幼貝



さい索はみぞで二分される



▲ツメタガイ
殻高9cm 殻径12cm



▲サルボウガイ
殻長7.5cm 殻高5.5cm



ハマグリ 殻長8.5cm 殻高5.5cm
2本の黒っぽい色の放射帯

接合部はややとがる



▲バカガイ 殻長6.5cm 殻高5.5cm

ふちが直線状で曲がらない



▲マテガイ
殻長12cm 殻高1.8cm



▲ハイガイ
殻長3cm 殻高4cm

放射肋は17-18本で、いぼがある



▲カガミガイ 殻長7cm 殻高7cm
はんもんがなく純白色



▲アサリ
殻長4cm 殻高3cm
横筋は変異が多い

後背部に強い放射肋がある

▶オキシジミ
殻長5cm 殻高5cm



殻頂はより上がる



▲シオフキガイ 殻長4.5cm 殻高3cm



▲イソジミ 殻長5cm 殻高4cm

歯丘がはり出す

しん蓋が大きい

右殻よりふくらみ強い



▲オオノガイ
殻長18cm 殻高5.5cm

左殻は右殻よりやや小さい

殻をとしたとき横たんは開く

だん帯受は大きくきと状

ほう は てい かん べき
防波堤・岸壁

都市に面した内湾には、コンクリートなどでつくられた港のし設がたくさんあります。これらのし設は内湾に岩礁があるのと同じようなかんきょうをつくりだしています。このため岩礁にもすむ貝がここで見られます。しかし外洋に面した岩礁とはちがう特別のかんきょうでもあります。ここには群れをなしてすむ貝が多く、岸壁、くい、防波堤などにくっついて生活しています。ときには豊しよくのいかだや発電所の取水口などに大量にくっつき、ひ害をあたえることもあります。



▲イボニシ
殻高 3cm 殻径 1.8cm



▲ムラサキガイ 殻高 7cm 殻径 4cm



◀マガキ
殻高 3cm 殻径 5cm

むらさき色の放射状色帯がある



スミノエガキ▶
殻高 4cm 殻径 1cm

深場

内湾の水深10mより深い所は、波のえいきょうも小さく、やわらかいどろがつみかさなっています。河川から流れこむ栄養分もたい積します。冬には表面の海水がひやされ、底層水との交かんが行われやすい所でもあります。潮の流れも少なく、夏は酸素が不足する状態になります。身を守るために、どろ底にもぐって、水管だけを長くのはして、じっとしている貝がいます。またここには、食用となる貝もたくさんいます。



▲ツノガイ

殻長10cm
殻口径2.5cm



すな はま 砂 浜

外海に面した砂浜は、内湾よりは食べ物も少なく、波のえいきょうもうけて、不安定なかんきょうです。足場になる石や岩もなく、かくれ場所也没有せん。外敵や潮の流れから身を守るには、砂の中にもぐって生活しています。このため足は岩にくっつくより、もぐるのに適した形をしています。体は砂底にかくれていても水管だけは外に長くのばしておいでえさをさがします。また水中のプランクトンなどもえらでこしとって食べています。

殻頂部はむらさき色をおびる



▲アリソガイ 殻長12cm 殻高9.5cm



▲キサゴ 殻長2cm 殻高3cm



▲チョウセンハマグリ

殻長10cm
殻高7cm

縦線は
ハマグリより
うしろの
直線的

ふくらみが
弱く平ら

いそ ば 深 場

水深が20mをこえる深場には、食用となる貝類が多く、漁場としては重要な場所です。海底はどろ底、砂底、砂でい底などかんきょうはいろいろで、小石のまざる砂底もあり、ドロールでめずらしい貝がとれることがあります。



▲ベンケイガイ

殻長8.5cm 殻高7cm

タマキガイ科のこう歯(こう歯)すべてくし状になる

殻頂部がふくらむ



▲テングニシ

殻長15cm
殻高7cm

殻口は
まるい

▲マルツノガイ

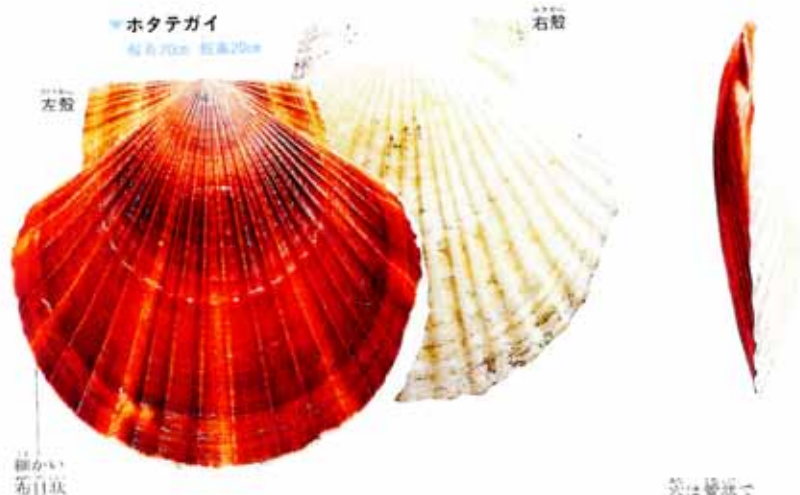
殻長14cm
殻口幅1.3cm



▲ウバガイ (ホッキガイ)

殻長9.5cm 殻高7.5cm

たん帯受が大きい



ホタテガイ

殻長20cm 殻高25cm

左殻

右殻

ヒレ
布目状

岩礁

石や岩などのある海岸をいそといいます。ここには波のしぶきだけがかかる所や満潮のときだけ海水にひたる所や、タイドプールなど、複雑なかんきょうがあります。このため岩礁にすむ生物の種類は豊富で、生活のしかたもさまざまです。あらい波にさらわれないように、いろいろな方法で、岩にくっついていたり、岩かげに群れをつくって、じっとしている貝などがいます。えさやかくれ場所の多い所ですが、外敵もたくさんいるところともいえます。



ヒレは管状で
ふつう4個

背面の部分がクロアワビや
メガイアワビより高い

▲マダカアワビ

殻長はふつう25cm



ヒレは管状で4〜6個

はばがせまい

▲クロアワビ

殻が
やや
大きい

殻長は2cmで5cm、10cm、15cm、20cm、25cm

大きないはがならぶ



▲スガイ

殻長3cm 殻高3cm



小さい
孔は
開かない



ヒレが強い

▲メガイアワビ

殻長15cm



ハチジョウダカラガイ
殻長6.5cm 殻径4.5cm



ハナマルユキダカラガイ
殻長3.5cm 殻径2.5cm



イボニシ
殻長3cm 殻径1.8cm



マダライモガイ
殻長4cm 殻径2.5cm

サヤガイモガイ
殻長4.5cm 殻径2.5cm



ベッコウイモガイ
殻長7cm 殻径3.5cm

キヌカツギイモガイ
殻長5cm 殻径3.5cm



カリガネガイ
殻長5cm 殻径3cm



イガイ
殻長15cm 殻径5cm



コケゴロモガイ
殻長7〜8cm 殻径7〜8cm



イワガキ
殻長15cm 殻径10cm



オハグログキ
殻長7cm 殻径4cm



ケガキ
殻長3〜4cm 殻径2〜3cm

殻皮状の薄板が重なりあう

パイプ状のとげが密生

南小泉遺跡と遠見塚古墳の考察

峯岸義雅

1. はじめに

南小泉遺跡は、仙台市若林区南小泉の比高差の小さい仙台平野の中央部を流れる広瀬川の北方に形成された自然堤防・後背湿地上に営まれた弥生時代から中・近世に至る複合遺跡であり、その規模は東西3km・南北約1.5kmの範囲に広がり、遺跡中央付近には遠見塚古墳がある。遠見塚古墳周辺には、弥生時代から古墳時代の大規模な集落跡があり、古墳時代土師器編年の「南小泉式」の標識遺跡である。

現在では、遺跡の真ん中を仙台バイパスが通り、付近には住宅や店舗が軒を並べ遺跡が地中に没した部分もある。特に昭和初期頃は一面的水田・畑地があり、巨大な遠見塚古墳の墳丘が見え、遠くに霞目飛行場があるだけの農耕平野が広がっていた。

2. 動機

昭和27年(1952年)中学2年の冬季に母の実家がある仙台市東部の畑地で農家では「探掘」とか「底掘」などと称して、上下の土を入れ替える作業が行われていた。いわゆる「天地返し」です。作業をしていた際に地表下30cm～40cmくらい掘ると、多量の土器の欠けらが出土し、特に黒土層からは素焼きの赤褐色の完成された土器が出土し、内部から石庖丁らしきものが出て驚きました。近くで農作業をしている農夫は出土した土器の欠けらを?(モツコ)に入れて堀に大量に投棄しているのを見て、この地は古代遺跡ではないかと、出土した土器や石製模造品数点と石庖丁を持ち帰り、東北大学考古学教授の伊東信雄先生を訪ねて、鑑定してもらったところ、南小泉遺跡であることを知りました。また出土した土器は古墳時代5世紀の土師器である

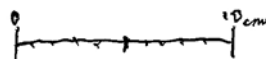
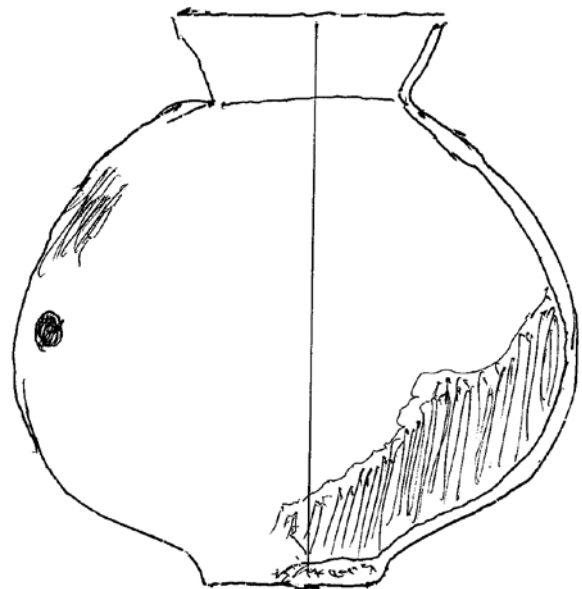


図1 南小泉遺跡採取の土師器

ことも教えられました。それ以来、南小泉遺跡研究のため、専門書を読み、宮城県内の遺跡を訪ね歩き、仙台市民図書館に連日通いつめました。将来は考古学者の夢を抱きましたが、夢は空しく挫折しました。

平成 24 年 6 月、与兵衛沼窯跡の見学会に参加、発掘された土器を見て、考古学への興味が再び湧き、もう一度勉強しようと思い、地底の森の研究員として入校し、考古学の基礎教育を初歩から学び、古代の研究を続けています。

出土した土師器を手にとると、古代人の生活の匂いが染み込んでいるようなロマンが感じられ、考古学への夢が膨らんでいきました。

母が生れ育った南小泉の沖積平野に古代の人々が住むようになったのは、いつ頃からなのであろうか。縄文時代後期になると、農業が伝わり、稲作が生産部門に於いて重要な位置を占めるようになると、水田耕作のできる低地に人々が住むほうが、高台に住むよりも生活上便利になって、人々は次第に平野に住居を構えるようになった。縄文時代に殆ど住むに適していなかった沖積平野に人が住みはじめ、そこが生活の基地となってゆき、これ以後の遺跡は沖積平野に多く発見され、洪積台地上に住む人は絶え、生活基盤が平地に移行してゆき、南小泉平野にも人が住みはじめようになったのです。

3. 考察

南小泉遺跡が知られるようになったのは、明治 40 年（1907 年）郷土の作家・真山青果が、この村を舞台にして、ほそぼそと生きる貧農の風景を作品「南小泉村」に書きました。しかし、貧しき村・南小泉は古代にあってはおおよそ正反対の誇りに満ちた豊かな生活をし、偉大な王が村に君臨していたのです。

仙台平野の歴史は南小泉から明けそめたのです。

南小泉遺跡を初めて世に発表したのが、昭

和初期の郷土の考古学研究者の松本源吉がいました。氏は膨大な数の遺物を収集し、遠見塚古墳の保存や埋蔵文化財の保護を提唱した研究者でもあった。

昭和 22 年（1946 年）遠見塚古墳の周辺にある霞目飛行場の拡張工事が行われた際、東北大学の伊東信雄教授が古墳の粘土に包まれた棺が 2 基あることが確認され、周辺から多量の石器・土器の出土があり、南小泉遺跡・遠見塚古墳という遺跡調査の出発点となったのである。

南小泉遺跡では、昭和 53 年（1978 年）から平成 13 年の 72 次をこす調査が遠見塚古墳周辺の調査と平行して進められてきた。この集落遺跡では、古墳時代の竪穴住居跡が群生したことが確かめられ、一層安定した農耕集落が営まれ、この地域は弥生時代から古墳時代への移行にも断絶がなく、宮城県における歴史時代を一貫してリードしていた遺跡でもあるのです。

南小泉遺跡を象徴するのが遠見塚古墳です。この大型古墳は全長 110 m で、雷神山古墳（名取市）、亀ヶ森古墳（会津坂下町）、玉山古墳（いわき市）、会津大塚山古墳（会津若松市）について東北地方第 5 位の大型古墳で、様式的には、雷神山古墳より一時代古い、仙台平野ではもっとも早く古墳時代の歴史を開いた大古墳であった。遠見塚古墳が築造されたのは、古墳時代 4 世紀であるが、3 世紀後半には全国的に巨大な前方後円墳が出



写真 1 昭和 10 年頃の遠見塚古墳（仙台市教委 2006）

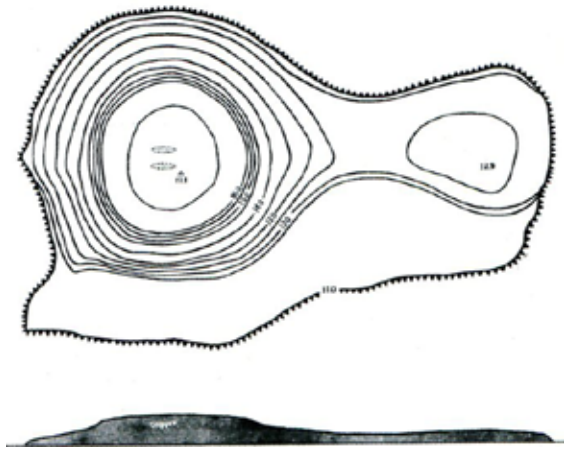


図2 遠見塚古墳の測量図（仙台市教委 2006）

現し、古墳時代の首長の墳墓は弥生時代と比べると規模が格段と大きくなり、形は前方後円墳などに統一されていきます。

仙台平野を基盤に高度の地域国家をつくりあげた遠見塚古墳の首長は、どの程度、畿内政権との政治的関係を保持していたものであろうか。いうまでもなく、古墳時代は大和朝廷が全国を統一する過程で、各地の首長が大和朝廷と同じ埋葬の儀式を行うようになったからであると考えられます。しかしながら仙台平野では、遠見塚古墳より時期が下降しこれより大規模な古墳といえば雷神山古墳のみである。しかも、この古墳は、埴輪壺が出土している点からみて、埴輪をもつ古墳のなかでも、比較的早い時期の古墳とみることができることから、遠見塚古墳とそれほどへだたらない年代に築造されたものである。

遠見塚古墳の次に出現し、仙台平野全体で統一した最初の首長として捉えることが妥当であり、仙台平野一帯にその覇権を確立させていたことは確実である。なぜならば、雷神山古墳の発掘調査を待たなければ明らかにならないが、王者の石棺ともいわれる長持形石棺や、直弧文刀装具、鹿角製装具つき刀子、櫛を出土させた経の塚古墳（名取市下増田）被葬者を配下に置くとすれば、遠見塚古墳から出土した副葬品は、舟形粘土槨2基とその中に納められた木棺の残片、粘土槨上にあっ

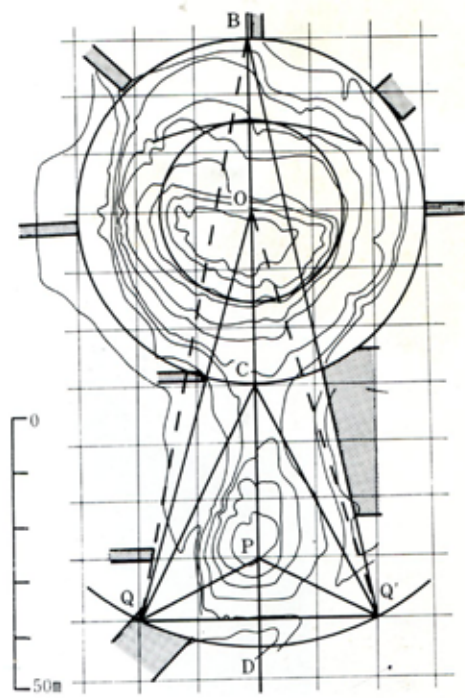


図3 遠見塚古墳の築造企画

た土師器の壺一つが確認されたにすぎないことから、大和朝廷との関係など具体的に考えることは困難であり、遠見塚古墳被葬者と雷神山首長には格段の差を示す政治性が考えられることは当然だろう。

4. おわりに

雷神山古墳の被葬者は、遠見塚古墳やその他の勢力を併合して、東北にはじめて、政治的社會、組織権力の巨大な支配を確立していたことが考えられる。

雷神山古墳の首長は、5世紀後半には、群小豪族層を統合し、広域政治圏を樹立し、畿内政権と密接な政治的関係を結んで、仙台平野の王者として築きあげていったものと解されるが、雷神山古墳や遠見塚古墳のより精密な調査成果が必要で、今後の発掘が待ち望まれています。そして、仙台平野に君臨した古墳時代の解明が一月でも早く実現できるよう期待したいものです。

参考文献

- 伊東信雄 1954 『遠見塚古墳』 宮城県文化財調査報告書
- 伊東信雄 1950 「仙台市内の古代遺跡」『仙台市史3』
- 高橋富雄 1979 『宮城県の歴史』 山川出版社

市民文化財研究員活動報告書 18

発行日 平成 26（2014）年 3 月 31 日

発 行 仙台市教育委員会

編 集 公益財団法人 仙台市市民文化事業団

仙台市富沢遺跡保存館（地底の森ミュージアム）

〒 982-0012 仙台市太白区長町南 4-3-1

TEL 022-246-9153